新・恋姫無双～蘇りし覇王と舞い降りし御遣い～

終焉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新・恋姫無双～蘇りし覇王と舞い降りし御遣い～

【Ｎコード】
Ｎ６７１６Ｘ

【作者名】
終焉

【あらすじ】
死んだ筈の王と天の御遣い、存在しないはずの二人が出会う時、新たな外史の物語が始まる。

ちなみにご都合主義の上にオリキャラが多数出るのでそれが嫌な人はバックしてください。後、週に一回程度のペースで更新するつもりです。気楽に見て頂けると嬉しいです。

プロローグ（前書き）

プロローグです。かなりわかりづらい内容かもしれません・・・。
ので指摘していただけると嬉しいです。

プロローグ

「はぁ・・・はぁ・・・」

・・・何故こうなったのだろう?周りは敵に包囲され逃げ場はない。体力も既に底をついた。部下も兵士も全員いなくなった。あるものは私と共に戦って死んだ。あるものは死を恐れ、降伏した。そうして一人ずついなくなり・・・ついに私一人になってしまった。

「・・・本当に何故だろうな」

全てを持っていたのに。力、知、名声、財力、全てを持っていた。なのに・・・何故私はこうなってしまったのだろう?今私はかつて見下していた相手に負けようとしている。私よりも弱く、馬鹿で、甘い。そんな相手に負けようとしている。

・・・屈辱だ。このまま私は死ぬのか?・・・あんなやつに負けてしまうのか?そう思うと身体中に力が湧いてきた。

まだ戦える。まだ負けていない。今私の中にあるのは怒り、誇り、意地、それで十分。さて・・・続けよう。まだ終わっていないのだから。

「はあっ!」

手に持つ槍を振るう。そのたびに鮮血が舞う。命が消える。だが、敵は減らない。切っても突いても、後から敵が沸いてくる。・・・上等だ。

「死にたい者からかかって来るがいい！！」

私は高らかに叫んだ。

・・・あれからどれだけの数の敵を殺したのだろう？・・・あれからどれだけの時間が経ったのだろう？・・・わからない。ただ・・・もう私は戦える状態では無い。それだけははっきりと分かる。

「・・・ここまで、か」

もう立つことも厳しい状態だ。こうなるまで良く戦えたものだな。ふと前を見ると・・・誰が向かってきた。おそらく武将だろう、周りの兵士達と格好が違う。

「・・・大したものです。流石、と言うべきですか。たった一人でこれだけの兵士を倒すとは・・・」

「・・・誉めても何も出ないぞ？」

「・・・それもそうですねーーー殿。さて・・・そろそろ終わらせましょう。せめてその命・・・私の手で絶たせてもらいます」

「・・・そうだな。ただの兵士に殺されるよりはマシだろう。ーーーだが」

「・・・？」

「・・・その前に聞きたいことがある。それまでは殺さないで欲しい」

驚いている様だ。無理もないな。だが、どうしても聞きたいことがあった。それを聞くまでは・・・死ねない。

「・・・なんでしょうか？」

「・・・何故私は負けた？圧倒的な力を持ち、優れた軍師も武将も兵士達もいた。全てを持っていた。なのに何故私は・・・あの女に負けた？」

「・・・確かに、貴女は全てを持っていました。ですが・・・足りないものがあります」

「・・・？足りないもの・・・？」

「・・・心ですよ。優しさや信頼と言った方がいいですか。貴女にはそれが無かった。ただ敵を殺し、怒れば、その感情に赴くままに戦う。周りが止めようとしてもそれを受け入れず、逆に殺そうとする」

「・・・それがどうした？私は王だ。敵がいるなら全て殺し、邪魔するのなら全て排除する。それが例え民だろうがな」

今までそうしてきた。私に刃向かう者は全て殺してきた。私に下らないことを言う者も、私に逆らう者も全て、私が絶対なのだから。

「・・・だからですよ。全てを拒絶する人が全てを手に入れれる筈

がない」

「・・・！」

「・・・あの人は違った。例え、力が無くても、知が無くても、名声が無くても、優しさと信頼があった。周りを受け入れる暖かさがあった。だから、人が集まる。彼女のために戦おうとする人が増えていく。彼女のために武を振るおうとする者が、知を使おうする者が」

「・・・」

「そして、あの人は自分の間違いや過ちを受け入れ、それを正そうとすることができる。それが貴女とあの人の一番違う所です」

間違い・・・？私は間違っていた？・・・ああ、そうか・・・私は力しか見ていなかったのだ。私に仕えた者達は何故私のために戦ってくれた？何故私のために知を絞ってくれた？

・・・私のためだ。私をのために全てを使ってくれた。私を守るために、私を勝利へ導くために、私を天下人にするためにがんばってくれた。・・・勿論、そうでない者もいるだろう。だが、多くの者達は私のために頑張ってくれた。それに変わり無い。

だというのに私は・・・ただ、感情に赴くままに力を振るい、行動した。彼等の思いを潰し、踏みにじった。

・・・負けて当然か、ようやくわかった。勝てる筈が無かった。天や運など関係ない。私は最初から彼女に負けていたのだ。

「・・・そうか、成る程な」

「・・・納得されましたか？」

「・・・ああ、最後にもう一つ・・・」

「・・・なんでしょうか？」

「・・・「この私に勝ったのだから、必ずこの地に平和をもたらせ」と、彼女に伝えてほしい」

「・・・わかりました。必ず伝えます。では・・・」

剣を抜き取り、私に近づく名も知らぬ武将。もう抵抗する気など無い。彼女なら・・・この地に平和をもたらすことができるだろう。・・・心残りがあるとすればただ一つ。こんな愚かな王に仕え、死んでいった者達・・・彼等に礼を言うことができない。それだけが心残りだった。

・・・あの世とやらで会えるだろうか？・・・無理だな。私は地獄にいくのだろうからな。

武将の剣が大きく振りかぶられ・・・一気に振り下ろされた。それと同時に私は意識を失い・・・死んだ。

死んだはず・・・だった。

第一話　物語の始まり（前書き）

投稿します。これから週一回のペースで更新します。大体日曜か月曜ぐらいだと思います。

第一話　物語の始まり

「・・・ここは？」

私は何故か「目が覚めた」。どういうことだ？私は・・・死んだはずだ。あの武将に斬られた感触ははっきりと覚えている。間違いなく死んだはずだ。

なのに・・・何故生きている？私はとりあえず辺りを見回すと・・・愛用していた槍があった。それを手に取り、もう一度辺りを見回す。広大な大地と山しか見えなかった。

「・・・夢？」

ふと、そう思ったが・・・死んだ者が夢を見るわけが無い。となると現実としか考えられなかった。

「・・・どうするか」

これから、何をするべきかと考える。・・・旅でもするか、彼女がこの地をちゃんと治めているか。それを確かめ、そして私に仕えた者達への礼を言うために。・・・もしかしたらその途中で彼女やその部下に遭遇し、殺されるかもしれない。だが・・・それでも、旅をしたかった。

「・・・しかし」

ここがどこなのかわからない。周囲に人の気配はないため、人に聞くこともできない。・・・いたとしても聞けるかどうかも怪しいが。

「・・・やれやれ」

何故か生きていたと思えば、どこなのかわからない場所に寝ていた。おまけに人のいる気配すら無い。食料や水が無いため適当に動く訳にも行かない。

「・・・雛がいれば」

私の愛馬がいれば問題なかったのだが、まあ、愚痴を言っても仕方ない。無いものは無いのだからな。

「・・・ふう」

つい、ため息が出てしまう。前途多難か。ふと、空を眺める。雲一つ無い青空だった。

「・・・ん？」

しばらく空を眺めるとキラッと光った様な気がした。

「・・・流星か。珍ーーー！？」

大して気にしなかったが、その流星が少しずつ落ちてきていた。そして、遥か向こうへと墜落した。凄まじい轟音と揺れが大地に響き渡った。

「くっ！な、なんだ・・・！？」

・・・私は轟音と揺れが収まると同時に流星の落ちた場所に向かっ

て走り出した。

・・・何故か行かなければならない。行かなければ必ず後悔する。そんな予感がした。

「な、何なんだよ・・・？」

俺・・・北郷一刀は今混乱していた。目を開けると何故か制服を着ていて、しかも見たことのない場所にいた。見渡す限りの地平線と広大な山々、どう考えても東京じゃないし、日本でも無い。

とりあえず俺は何故か落ちていた鞄、そして日本刀を拾う。この日本刀は家にあったはず家宝で、名は「黄龍」、四神を束ねる神の名を持つ名刀だ。

「・・・なんでこれが・・・？」

いくら考えてもまったくわからなかった。そもそも、何故こんな所にいるかもわからないのにわかるはずが無い。

「・・・歩くか」

ここでじっとする訳には行かない。何としても家に帰らないと、しばらく歩き続けると街道を見つけた。これにそって歩けばどこかの街に着くはずだ。そうしようとすると・・・。

「おい、兄ちゃん」

「？はい、何ですか？」

誰かに声をかけられ振り向くと・・・時代劇に出てきそうな盗賊の格好をした三人組がいた。・・・なんだ？番組の収録でもしているのか？俺がそう考えていると、三人組のリーダーらしき男が話しかけてきた。

「兄ちゃん、いい服着てんな。後、見たことも無い物もあるな。命が惜しけりゃ身ぐるみ全部置いてきな」

・・・なんでいきなりこんな目に逢わなきゃ行けないんだ？何かしたか俺？

「断る。渡す理由が無い。さっさと失せろ」

「・・・ほう、いい度胸だな兄ちゃん。だったら死にな！」

三人組が俺を包囲し、襲いかかろうとした。黄龍で迎え撃とうとした次の瞬間・・・。

「待て」

突然誰かの声が聞こえた。俺も襲いかかろうとした三人組もそっちの方を向くとそこには・・・。

「綺麗・・・」

絶世の美女、そうとしか思えない程美しい女性がいた。サラッと流

れる様な黒髪のロングヘアー、アイドル以上に整った顔とモデル以上のスタイルを持っていた。あまりにも美しいため、俺達全員がしばらくの間動くことができなかった。

「・・・はっ！び、びっくりしたぜ・・・まさかこんな所でこれほどの女に会えるなんてな」

いち早く気を取り戻した三人組のリーダーの男が黒髪の美女に近づこうとする。が、その前に彼女が俺達に話しかける。

「おい、さっき流星がこの近くに落ちてこなかったか？」

「・・・流星？」

「そういやさっき何か凄い音がした様な・・・」

この人流星を探しに来たのか？けど、俺達全員知らないことがわかったのか、立ち去ろうする。が、三人組のリーダーがそれを止める。

「・・・何のようだ？」

「へへ・・・姉ちゃん。俺達といいことーーーヒッ！？」

男が女性の肩に手を乗せようとした次の瞬間、彼女からとてつもない量の殺気が溢れだした。それを受け、男は固まり、部下の二人までもが動けなくなっていた。俺はかろうじて動けるといった状態だ。

「・・・ほう、私の殺気を受けて動けるとは・・・大したものだ」

この人・・・無茶苦茶強い・・・！殺気からそれを感じ取れる。一

方女性は俺に興味を持ち、近づいてきた。

「名は何という？」

「え、えと・・・北郷一刀・・・です」

「・・・変わった名だな。姓が北で名が郷、字が一刀か？」

字？確かそれって・・・。

「い、一気に襲いかかれ！相手は二人、数はこっちの方が上だ！」

「「へ、へい！」」

動ける様になったのか、三人組が一斉に俺達に襲いかかる。俺が迎え撃とうとしたが、女性に止められる。

「準備運動ぐらいにはなってくれよ？」

男が剣で襲いかかるが女性は手に持っていた槍でいとも簡単に払う。そして、隙だらけになった男に強烈な蹴りを叩き込んだ。とてつもない威力に男は吹き飛び、気絶する。それを見た二人は驚きのあまり動けなくなってしまう。

「な、な・・・」

「・・・やれやれ、一人倒された程度でこれか。情けない」

女性はつまらなさそうに槍を振るい、残りの二人を槍の腹や後ろで気絶させる。

「・・・準備運動にもならなかったな」

退屈そうに呟く女性、圧倒的だったため、まともな実力はわからない。けど、この人は間違いなく強い。桁違いの実力者だ。

「・・・さて、片付いた所で・・・話の続きをしようか」

「は、はい」

「確か、姓が北で名が郷、字が一刀だったな?」

「い、いえ。姓が北郷で名が一刀です。字はありません」

それを聞き、女性は驚いていた。まさかここって・・・。

「字が無い?変な奴だな・・・しかし、その光輝く服・・・。もしや、どこかの貴族か?」

「ち、違います。これは俺達の国では誰でも着る一般的な服です」

「・・・一般的だと?だが、そんな服見たことも無いぞ?そっちの黒く細長い箱も見たことが無い・・・」

箱?もしかして鞄のことかな?

「その・・・これ鞄って言うんです。中に多少の物を詰め込めことができて気軽に運ぶことができるものです」

「・・・何者だ?」

「・・・えっ？」

いきなり女性が俺に槍を突きつけてきた。

「・・・見たこともない物に服、珍しい形の剣、そして字が無い。どう考えてもおかしい。貴様一体何者だ？」

・・・嘘を言えない。言えばおそらく殺される。

「・・・多分俺はこの地の人間じゃありません。別の・・・他の国からやってきた人間」

「・・・他の国？漢や秦、楚とも違う国と言うことか？」

漢、秦、楚・・・やっぱりここは・・・。

「・・・はい、そして・・・俺は未来・・・約二千二百年後から来たんだと思います」

「・・・未来？」

馬鹿げてると言われそうだ。けど、そうとしか思えない。この人は漢、秦、楚の国の名を言っていた。そして、字・・・それらの情報をまとめるとそれしか無い。俺は二千二百年前の中国に来てしまったのだと。けど、こんなこと信じるはずが無いし・・・どうしよう？

「・・・嘘ではなさそうだな」

「え？」

信じた?普通信じられる内容じゃないのに・・・。その後女性は槍を俺から離した。

「あの・・・信じるんですか?こんなあり得ない話・・・」

「・・・ああ(私も似たようなものだからな)、すまなかったな。いきなり槍を突きつけたりして」

「い、いえ・・・。あの・・・貴女の名前は・・・?」

女性の名を問うと、困った様な表情になる。・・・どうしたんだろう?

「・・・まあいいか、名を言おう。但し、驚かないでくれよ?」

「は、はい」

「姓は項、名は籍、字は羽」

・・・え?この名前・・・ま、まさかこの人・・・!?

「西楚の・・・覇王だ」

第二話　覇王、項羽（前書き）

一気に二話投稿します。これから大体上手く行けば一週間に二話、悪ければ一話ぐらいのペースで進めていきます。

第二話　覇王、項羽

「西楚の覇王・・・項羽？」

「・・・ああ」

・・・よし、整理しよう。まず俺は目を覚ますと見知らぬ場所にいた。次にいきなり三人組の強盗に襲われそうになった瞬間この女性が現れ、三人組を倒した。最後に女性に色々質問され、名前を聞くと項羽だと言った。

結論、あり得ない。だって項羽って男だろ！？こんな綺麗な人じゃないだろ！？何だ！？歴史が間違ってたのか！？項羽って女だったのか！？

「・・・どうした？やはり驚いたのか？」

えーと・・・項羽？さんが俺を心配した様子ーーーって、良く考えたらこの人がもし本当に項羽ならかなりヤバイ、だって項羽と言えばかなり残虐な性格だったはずだ。下手すればこの場で殺される。会話するなら慎重にかつ丁寧に話さないと・・・。

「は、はい。でも少し驚いただけです」

「そうか。確か北郷は未来から来たと言っていたな？なら、私のことを知っているのではないのか？」

うっ・・・痛い所を突かれた。確かに知っているけど・・・男として本に記されています、なんて言ったらおそらくーーーというか間

違いなく殺される。俺も腕に多少自信はあるけど、この人と比べれば赤子みたいものだ。刃向かっても一瞬で負けるだろう。何としても誤魔化さないと・・・。

「そ、その・・・確かに名前は本に記されているんですけど記述があまり無かったので・・・わからなかったんです」

「成る程・・・そう言うことか。それなら納得だな」

以外とあっさり信じた・・・。やっぱり歴史通り単純な性格なのかな?

「・・・今余計なことを考えなかったか?」

「いえ、まったく」

どうやらかなり勘が鋭い様だ。これからはできるだけ変なことを考えない様にしよう。

「・・・ならいい。さて・・・これからどうするか。ここがどこかもわからんし・・・」

・・・?あれ?何か変だな・・・もし、この人が本当に項羽ならなんで自分の居場所がわからないんだ?まさか誘拐・・・される訳ないよな。仮にも「あの」項羽なんだし・・・。

「えっと・・・項羽さん。なんでここがどこなのかわからないんですか?」

普通に考えて変だ。城や陣から出てきたなら来た道を沿って帰れば

いい筈・・・。

「まさか迷子とか・・・」

「・・・本気で言ってないだろうな?」

ギロッととてつもない殺気を込めた視線を向けられた。・・・馬鹿か俺は、あの項羽にこんなこと言えばこうなるだろ。こりゃ死んだかな・・・。

「・・・まあ、私が居場所を知らないからそう考えたのだろうし・・・仕方ないな」

・・・この人本当に項羽なのか?確か項羽は喜怒哀楽が激しくて、ちょっとした挑発で怒り一度怒れば気が済むまで暴れる短気な性格のはずだ。けど、この人を見るととてもそんな風には見えない。

「あの・・・本当に貴女は項羽さん何ですか?」

「・・・私が嘘をついているとでも?」

また、彼女から強烈な殺気が放たれる。

「そ、その・・・項羽と言えば強さこそ天下無双と言われる程のものですけど政治の方は全然駄目でちょっとしたことで怒り、周りの忠告を無視する人で韓信から「匹夫の勇」や「婦人の仁」、そう評価されているって本に記されていますし・・・」

「・・・「匹夫の勇」、「婦人の仁」か。そうだな、北郷の言う通りだ。私は自分勝手な愚かな王だ」

・・・認めた?「あの」項羽が?本には確か最後まで負けた理由について自分が悪いのではなく、天が見捨てたからだって言ってた筈・・・?

「・・・北郷、お前に言うことがある。・・・私は死んだ人間のはずなんだ」

「・・・え?」

死んだ人間?でも今俺の目の前にちゃんと存在してるけど・・・?

「・・・私は劉邦との最後の戦い・・・岩山のそびえ立つ亥下で名も知らぬ武将の手によって死んだ。・・・だが、何故か私は目を覚まし、ここにいた」

「・・・幽霊?」

「・・・幽霊が生きている人を倒せるか?」

少々呆れながら言う項羽さん。そりゃ、無理だ。何言ってるんだ俺。けど、この人と俺・・・少し似ている。俺も目を覚ますと見知らぬ場所にいた。

「あの・・・実は俺も似たような境遇なんです。ただ、俺は家で寝てたのに目を開けるとここにいたんですけど・・・」

「・・・ほう、私と似ているな。しかし、私と違って死んでいないのか・・・では何故ここにいるんだ?」

「・・・さあ？そもそも俺達なんでこんな所にいるんでしょう？」

「・・・わからん」

「・・・とりあえず、どこかの街に行きませんか？」

「・・・そうだな、ここにいても仕方ない」

けど、ここがどこなのかわからないし・・・場所がわからないとまずいな。

でも今の時期だけは予想できる。項羽さんの話からしておそらく劉邦が天下統一した少し後だろう。

「・・・だが、その前にここがどこか確認する必要がある。そこに気絶している三人組に聞くとしよう」

項羽さんが気絶している三人組を叩き起こした。起きた三人組は怯えた表情で項羽さんを見つめていた。・・・無理もないな。あの三人組項羽さんに気絶させられたんだし・・・。

「ヒッ！な、なんだよ！も、もう何もしないから見逃してくれ！」

「・・・ここがどこなのか答えろ。そうすれば見逃してやる」

「は、はい！ここは洛陽の近くです！」

「洛陽・・・。方角はどっちだ？」

「あ、あっちの方角です」

「そうか、もう行っていいぞ」

項羽さんが言うなり、三人組は蜘蛛の子を散らす様に逃げ去った。

「では行くぞ北郷」

「は、はい。けど、大丈夫ですか?劉邦とか知っている人に見つかったら・・・」

一度殺したはずなのにまだ生きていることがわかれば殺しに来るはずだ。いくら項羽でも流石に一人では大軍に敵う訳がない。

「・・・その時はその時だ。安心しろ、お前は巻き込まない様にする」

言い終わると、項羽さんは洛陽に向かって歩き出した。・・・とりあえず付いていくか。

しばらく歩いていると自然と口数が減り、静かになる。地面を踏みしめた音だけが辺りに響いた。こう静かだと嫌だな・・・。

「・・・あの項羽さん?」

「・・・なんだ?」

「・・・本当に項羽さんは一度死んでいるですか?」

「・・・そう言われると何とも言えん。今は何故か生きているからな・・・」

「・・・転生したってことですかね？」

「・・・それは違うだろう。もし、そうだとすれば私は今赤子のはずだ」

だよなぁ・・・。じゃあ、なんで生きているんだろ？

「・・・死にかけたけど、劉邦が治療した後に見逃したとか」

「・・・それも違うだろう。大体それはあり得ないし、そうだとしたら何故私はこんな所で寝ていたのだ？」

「・・・ですね、そういや項羽さん。確かさっき流星を探してましたよね？」

「ああ、この近くに落ちてきてな。何故か気になり、落ちてきた方角に向かうと・・・」

「俺が三人組に絡まれていた状況に出くわした、と言うことですね」

「そんなところだ」

んで、さっきの騒動になって今は一緒に洛陽に向かっている、か。

「所で北郷、お前の国の話をしてくれないか？」

「え？」

「こうして静かに歩くというのはどうも落ち着かなくてな・・・洛

陽に着くまででいいから話してくれないか？」

「構いませんけど・・・」

その後一時間程歩きながら俺の国について色んなことを話した。普通なら先の時代の話なんて信じないはずだけど項羽さんは全部受け入れていた。多分、既に自分が信じられない状況にいるからだろう。・・・こうして話すとやっぱりこの人が項羽とはとても思えないよなぁ・・・。

「ふむ・・・北郷の国は凄いな。空を飛ぶ乗り物に馬より速く走る鉄の箱、後は遠くにいても会話できるええと・・・「けーたいでんわ」だったか？そんなものまであるのか・・・」

「はい。あ、そういえば俺持ってたっけ。見ますか？」

「頼む」

胸のポケットから携帯電話を取り出し、項羽さんに見せる。

「・・・こんな小さな箱で会話のやり取りができるのか？」

「これが二つあれば出来るんですけど・・・。あ、でもこういうことは出来ますよ」

「？」

俺は携帯のカメラを項羽さんに向ける。項羽さんに少し止まってもらう様に言ってカメラの照準を合わせ、シャッターを切る。一瞬光ったせいで項羽さんが驚いてしまった。フラッシュ切れば良かった

な。

「な、なんだ今の光は！？」

「す、すいません！言うの忘れてました」

「まったく・・・気を付けてくれ。で、今何をしたのだ？」

「項羽さんを撮ったんです。これを見ればわかりますよ」

項羽さんが携帯を覗くと彼女の写真が写っていた。

「？・・・！これは・・・私の絵か？」

「はい、ちょっと違いますけど大体そんなものです。さっき光ったのは写すのが終わった合図なんですよ」

「ふむ・・・やはり凄いな。他に何かできるのか？」

「今は無理ですけど、他には色んな情報を調べたりすることも出来ます」

「・・・大したものだ。しかもお前の国ではそんなものをほとんどの者が持っているとはな・・・」

まあ、これ・・・そういう物だし。けど、項羽さん達からすればこれはお偉いさんしか持つことができないと思ってるんだろうな。俺は携帯をポケットに戻し、項羽さんと一緒に再び歩き出した。

それから三十分程歩くとようやく洛陽が見えてきた。

「後ちょっとだな」

「ええ、項羽さんは洛陽に着いたらどうするんですか？」

「・・・着いた後は旅に必要な物を一通り買って・・・それから各地を回りたい。私に仕え、死んでいった者達に礼を言うために」

「！」

「・・・北郷、私を知っているならば私が今までどんなことをしたか知っているだろう？」

「・・・はい。降伏してきた兵士や落とした城の民を皆殺しにし、始皇帝の墓を荒らして財宝を全部盗み出し、反論してきた義帝を殺したり・・・他にも色々と知っています」

「・・・そうだ。そのような愚かな行為ばかりを繰り返したにも関わらず、私に一生懸命仕え、死んでいった者達に・・・礼が言いたい。それを終えるまでは死ねない」

・・・多分この世界は俺の知る歴史とは違う世界だ。だから、なんで項羽さんが自分の過ちに気づいたかはわからない。けど、これだけははっきり言える。今俺の目の前にいる人は俺が知る項羽ではない・・・立派な王だ。

「・・・凄いですね」

「・・・？」

「その・・・自分の過ちに気づいた所です。多くの人はそれに気づかずにまた過ちを犯したりしますけど、項羽さんはそれに気づいた。だから、今まで支えてくれた人達に礼を言おうとしているんでしょう？それが凄いって思ったんです」

「・・・ふっ、私もその多くの人と変わらん。最後の最後でようやく気づいたのだからな」

「それでも凄いと思います」

「・・・そ、そうか。そうはっきり言われると・・・少し照れるな」

頬を少し赤らめる項羽さん。・・・かなり可愛かった。なんだかんだ言ってとんでもない美人だし・・・。

「と、所で北郷はどうする？お前行く宛が無いのだろう？」

「・・・そうなんですよね」

本当にどうしよう？項羽さんは目的があるけど、俺には無い。家に帰る方法やここに来た原因を探るなら・・・色んな場所に行った方がいいな。なら・・・。

「あの・・・項羽さん。俺も一緒に行っていいですか？」

「・・・なに？」

「俺は帰る方法やここに来た理由を見つけたいんですけど、そのためには色んな場所を回った方がいいと思うんです」

「成る程、確かにそうだな。お互いこの地を回る必要がある。なら、一緒に旅をした方がいい、か」

「はい」

旅は道連れ、世は情けって言うしな。

「・・・私は構わん。だが、自分の身は自分で守れよ?」

「わかりました。その代わり、俺を鍛えてくれませんか?」

「ほう・・・面白い。だが、私は今まで人を鍛えたことが無い。上手く加減できるかわからんぞ?」

うっ・・・す、凄い威圧感だ・・・!覇気って奴か・・・!けど怯む訳には行かない!

「それでもいいです!お願いします!」

「・・・ふっ、いいだろう。鍛えてやる。途中で逃げ出さない様に頑張るんだな」

・・・なんだろう。今とてつもない危険を感じた。・・・生きてられるかな俺?い、いや!あの項羽に鍛えてもらえるんだ!頑張らないとな!

「よし、着いたぞ」

「うわぁ・・・大きい」

話をしている間に洛陽に到着した。三國志の時代では確か最初は都になっている場所だ。

「・・・？」

「・・・どうしたんですか？」

項羽さんが洛陽を眺めているが、何故かおかしいと言った表情をしていた。

「・・・壁が古いような気がする。私が見た時はこんな風では無かったはず・・・」

「・・・気のせいじゃないですか？それよりさっさと入って買い物済ませましょう」

「・・・それもそうだな」

気にすることでもないかと付け足し、先に洛陽に入る項羽さん。俺は少ししてから入った。

第三話　確認、そして始まる旅（前書き）

今回で序章が終わって、次の話から旅編がスタートします。それと出来れば後書きも見てください。

第三話　確認、そして始まる旅

項羽さんが先に街に入り、俺が後を追うが、項羽さんがいきなり止まった。急に止まったせいで彼女にぶつかってしまう。

「いつつ・・・どうしたん・・・です・・・か」

俺が街を見回すと思わず絶句した。・・・そこには信じられない光景があった。人々は疲れきった様な表情をしていて、兵士達が威張り散らすかのように歩いていた。

「・・・どういうことだ」

項羽さんの方を見るとやはり俺と同じ様な表情をしていた。いや、寧ろ彼女の方が俺よりショックが大きかったようだ。

・・・無理も無い。なんせ劉邦がこの大陸を統一し、平和をもたらしたはずだ。なのにこの街は廃れていた。・・・一体どうなっているんだ？

「・・・とりあえず行きましょう」

「・・・そうだな」

まず、俺達は二人ともお金がまったく無い。だから、街の人達に聞いて適当な質屋に向かった。そこで俺は鞄の中にあった紙とボールペンを、項羽さんは身に纏っていた装飾品を売って資金にした。劉邦の時代なら紙はかなり高価な物だろうし、ボールペンも珍しい物だったし、項羽さんのもかなり珍しい装飾品だったから結構な値で

売れた。

かなりの量のお金を手に入れた後、今度は宿の場所を聞き出し、宿に向かう俺達。途中で気力が無いせいで多少ではあったが、街の人々が項羽さんに見とれていた。綺麗だからなこの人・・・。

兵士達に見つかると厄介なことになりそうなので、急ぎ足で宿に向かった。入ると俺は宿の主人から話を聞くことにした。

「あの・・・ここ洛陽ですよね」

「はい・・・がっかりしましたか?」

「・・・何故こうなっている?」

「・・・もしかして、あの人達のせいですか?」

「ええ・・・あまり大きな声では言えませんけど」

視線を兵士達の方に向ける俺達、一方の兵士達も相変わらずの態度で歩いていた。

「・・・この街の現状を太守に言ったらどうだ?そうすれば何とかなるだろう」

確かに、そうすれば劉邦やその臣下達がすぐに彼等を裁いてくれるだろう。だが、主人の口からでたのはとんでもない言葉だった。

「・・・無理ですよ、あの人達は十常侍の兵士達なんです。ですからいくら言っても相手にされません」

「・・・え?十常侍?」

ち、ちょっと待て。確か十常侍って三國志の時代に横暴の限りをつくした宦官達だよな?なんでこの時代に・・・待てよ?

そもそも俺達は今が何年なのかわかっていない。俺は項羽さんがいるからてっきり、今は劉邦が漢王朝を作り上げた少し後だと考えていた。けど、そうじゃないとしたら?

・・・確認するしかない。けど、その前に・・・。

(・・・項羽さん)

(?・・・何だ?いきなり小声で話しかけてきて、普通に話せばいいだろう)

(・・・今から俺は主人にあることを聞きます。それがどんな内容であっても驚かないでください。後、「項羽」って名前を使わないでください)

(!どういうつもりだ!名を捨てろと言うのか!)

・・・やっぱり怒るよな。けど、ここで項羽さんが自分の名を言えばおそらくとんでもないことになる。それは避けたい。

(理由はすぐにわかります!だから、お願いします!黙っていてください!)

(・・・わかった。但し、納得できる内容でなければ・・・)

（わかってます）

おそらくは殺される。けど、こうでもしなければまずい。何とか項羽さんを説得し、主人に聞いた。さっきから小声で話していたせいで少し変な人だなって思われているみたいだけど、この際そんなことどうでもいい。確認しなければならないからだ。

「あの・・・主人、劉邦って知ってますよね」

「はあ?何言ってるんですか?そんなの誰でも知ってますよ。今から約四百年前に漢王朝を作り上げた人でしょう?」

「!?よ、四百年前・・・!?」

・・・思った通りだ。一方の項羽さんは街に入った時以上に驚いていた。そりゃそうだろう。だって劉邦が四百年前にいたと言っているんだから。

「ええ、劉邦・・・漢の高祖は約四百年前に覇王、項羽とともに秦を滅亡させ、その後項羽を倒してこの大陸を統一した人物です。こんなこと子供でも知っていますよ?」

主人が説明し終わると項羽さんは口を開けたまま、固まっていた。あまりにも衝撃的な内容に開いた口がふさがらなかったのだろう。

「・・・主人、部屋に案内してくれませんか?」

「はい。どうぞこちらです」

「行きますよ」

「！あ、ああ・・・」

呆然としていた項羽さんに声をかけ、一緒に部屋に向かう。項羽さんを先に部屋に入れ、俺は周りを警戒しながら入った。

「・・・項羽さん」

「・・・・・北郷、これは・・・これは一体どういうことだ！？何故店の主人は劉邦や私が四百年前にいた人物だと言っていたのだ！？」

予想通り項羽さんは俺に詰め寄ってきた。信じられない内容を聞き、平常ではいられなくなったのだろう。

「項羽さん！今から全部説明します！だから落ち着いてください！このままだと話せません！」

「！す、すまない・・・」

ハッとした彼女は俺から離れ、近くにあったベッドに腰を下ろし、俺が言うのを待った。

「・・・項羽さん。信じられないかもしれませんが・・・俺達が今いるこの世界は・・・項羽さんがいた時代の約四百年後の世界なんです」

「・・・・・・冗談だろう北郷？」

「・・・事実です。そして・・・もう劉邦や項羽さんが知っている人達は全員いません。四百年前にいた人が生きているはずがありません」

「・・・・・北郷、少しの間一人にさせてくれないか？・・・・頼む」

「・・・はい」

俺はすぐに部屋を出て、主人の元に向かった。まだ、いくつか聞きたいことがあるからだ。・・・大丈夫かな項羽さん。

部屋を出た後、主人にいくつか質問し、大体のことがわかった。まだ霊帝が崩御されていなかったことを考えると反董卓連合は無い。おそらく今は黄巾党が動き出す前って所か。

・・・そして、もう一つ。ある予言の内容を宿の主人から聞いたが・・・その内容が気になって仕方なかった。

「・・・大丈夫かな」

いくつか手に入れた情報を項羽さんに伝えようと部屋に戻ろうとしたが・・・心配だ。四百年後の世界に来てしまったんだ。いくら彼女でも不安だろう。

部屋の手前で止まり、一旦扉を叩く。

「・・・誰だ？」

「・・・俺です」

「・・・北郷か、入っていいぞ」

部屋に入ると項羽さんがベッドに腰掛けたままだった。けど、さっきと比べてかなり落ち着いたようだ。

「・・・何のようだ？」

「その・・・いくつか情報を手に入れたから話そうかと思って・・・」

「・・・そうか、すまないな。だが、私にはあまり意味が無いのではないか？」

「・・・一応言っておきます。必ず近い内にこの大陸はまた戦乱の世になります」

「・・・この街の様子を見ればあり得なくは無いな」

三國志時代の首都である洛陽でさえ、こんな状態だ。なら、他の場所はもっと酷いはずだ。

「・・・項羽さん。俺は項羽さんがいた時代以外にもこの時代についても知っています」

「・・・ほう」

「今の政治は最悪の状態です。役人は腐りきり、民はあまりにも重い税のせいで苦しみ、不満が限界まで溜まっています。・・・もうすぐこの大陸に大規模な暴動が起きます。結果・・・罪の無い多くの民が死ぬことになります」

「・・・北郷、はっきり言ったらどうだ?」

「・・・わかりました、はっきり言います。項羽さんこの大陸に平和をもたらすため、俺に力を貸してくれませんか?」

「・・・やはりか。だが北郷、お前は家に帰りたいのでは無いのか?」

・・・確かに最初は家に帰りたいと言った。けど、それは今が平和な時代だからと思っていたからだ。こんな状況の中でそんなこと考える気は無い。

「・・・罪の無い人達が死んでいる最中に自分一人だけ帰る気はありません。そこまで薄情な人間ではないつもりです」

「ふっ、そうか。甘いやつだ」

「それでもいいですよ。一人でも多くの人を助けられるなら・・・俺はなんだってします」

「・・・なら北郷、一つ聞くぞ。お前に覚悟はあるのか?・・・人を殺す覚悟が」

「!」

人を・・・殺す覚悟、そうだ。戦うなら当然相手の命を奪わなくてはいけない。そして、それは決して軽いものじゃない。人の命なんだから。

「・・・私は既に何百何千・・・いや、何十万という人の命を奪っている。だが、お前はまだ人を殺したことは無いだろう?平和な国で生きてきたのだからな」

「・・・はい」

「お前はその剣で・・・人を殺せるか?もし、殺せば間違いなく苦しむだろう。・・・私もそうだ。私も初めて人を殺めた時は怖かった」

あの項羽でも・・・最初は怖かったんだ。いや、それが普通だろう。

「槍で人を刺した時の感触・・・傷口から流れる血・・・冷たくなった身体、全てが怖かった。しばらくは夢に出てくる程だった。勿論、今ではそんなこと無いが・・・それでも当時のことははっきりと覚えている。それほどまでに辛いことだ」

「・・・」

「・・・だが、人によってはそれ以上に辛いことがある。なんだと思う?」

「・・・わかりません」

「それは・・・人を殺す内に少しずつ何も感じなくなることだ」

慣れてしまうのか・・・。人の「死」に・・・。

「・・・そして、何時しかその事に気づき、狂ってしまうやつや逃げ出すやつも少なからずいる。当時の私はその者達を愚か者と罵ったが・・・今ならわかる。彼等は優しすぎたのだ。だから、罪の意識に耐えきれず狂ったり、逃げ出したりした」

「・・・」

「・・・そして北郷、お前にもその可能性はある。人を助けたいと思うやつ程、優しく、人の命の重さを知らないやつはいない」

「・・・戦う内に・・・俺もその人達の様になるかもしれない、ってことですか？」

「・・・その通りだ」

・・・確かに項羽さんの言う通りだ。まだ、人を殺したことも無い俺が戦うなんてことできるか？・・・でも。

「・・・それでも、戦いたいです。確かに人を殺すことは怖いです。・・・でもだからと言って人を見捨てたくはないんです。人を殺して後悔するよりも・・・人を助けられなくて後悔する程がよっぽど嫌なんです」

「・・・本当に甘いやつだ。しかし、優しいやつだ。・・・いいだろう」

「え？」

「力を貸してやろう。私の力を、な」

「本当ですか！？」

「構わん。だが、私にはその前にやらなければならないことがある。」

「項羽」として・・・最後に成さねばならんことだ」

・・・多分洛陽に着く前に言っていたことだ。項羽さんに一生懸命仕え、死んでいった人達への礼と・・・お詫び、それだろう。

「わかりました。ならそれが終わったら迎えにーーー」

「・・・何言っている。お前は私と旅をするのだろう？」

「・・・え？だって各地を回るんですよね？」

「お前と一緒に回るに決まっているだろう。大体お前、誰に仕える気だ？もし、自分で旗揚げするつもりだとしても私とお前の二人だけで何とかなると思うか？」

「・・・あ」

そういや、そうだ・・・。項羽さんが女である以上、今の時代の英雄・・・劉備や曹操や孫堅・・・他の武将達も女である可能性は高い。

それに項羽さんが死ぬ間際に変わった様に、彼女達も本来の歴史とは違うかもしれない。そういう人達を自分の目で見る必要があるし、二人しかない現状では仲間を増やす必要もある。

「・・・その様子だと・・・何も考えてないな」

「・・・すいません」

そのことについてまったく考えてなかった・・・。どうしてもこの世界を何とかしたいとか、あの予言の内容について考えてたし・・・。

「・・・はあ、とにかく。誰かに仕えるか、それとも自分で旗揚げするか、いずれにしても今の大陸を回らなければできんことだ」

「・・・そうですね。それにもう一つ理由があります」

「・・・？まだ何かあるのか？」

「はい、ある人物・・・管輅と言う占い師を探す必要があります」

「・・・占い師？北郷、何故私達がその管輅と言う占い師を探さなければならないんだ？」

項羽さんの疑問はもっともだ。普通に考えれば俺達が管輅を探す理由は無い。・・・「普通」なら。

「・・・実は今この大陸中にある予言が広まっているんです」

「・・・予言？どうせ根拠の無い出鱈目な内容に決まっている。そいつをわざわざ探す必要は無いだろう」

「・・・「この大陸が再び戦乱の世になる時、白き光輝く衣を身に

纏いし天の御遣いと最強の武神を乗せた二つの流星が舞い降り、戦乱の世を終わらせるであろう」」

「白き光輝く衣と纏いし天の御遣いと最強の武神・・・？」

「・・・多分、これは俺と項羽さんのことだと思います」

「！」

俺は別に自分が天の御遣いだ、と言いたいわけじゃない。ただ、白き光輝く衣ってのはおそらく俺が今着ている服だろう。そして、最強の武神ってのは多分項羽さんのことだ。

そして、気になるのはこの予言のある部分・・・「戦乱の世になる時」って所だ。内容のことを考えると、つまりこの時に「いきなり現れた」ってことになる。そうなると、この予言に該当するのは二人は俺と項羽さんだけだ。何せ「いきなり」この戦乱の世に来たんだから。

・・・もしかしたら物凄い勘違いなのかもしれない。他の誰かなのかもしれない。けど、どうしてもこの予言に出ている二人が俺達としか思えなかった。

これがもし、どちらか一人ならあまり気にしなかっただろう。けど、この予言の内容はあまりにも俺達二人の特徴を当てすぎていてる。

「・・・確かにその予言は気になるな。まるでその管輅と言うやつは我々がここに来ることを予想していたような・・・」

「そこなんです。なんで今の時代の人間が突然過去と未来から現れ

た俺達の特徴を知っているか。それを知るためには・・・」

「管輅に会って問いただすのが手っ取り早い、か」

「そう言うことです。それにもしかしたら俺達がここに来た理由も知っているかもしれません」

「納得だ。だが、その予言の内容通りだと、私が見た流星はお前だった、と言うことになるな」

「・・・そうみたいです。多分、最初は項羽さん、次に俺だったんでしょうね」

「・・・良く生きているな私達、空から落ちてきたのだろう?」

・・・確かに、なんで無傷なんだろう?空から落ちてきたのに。そりゃ、無事な方がいいけど。

「・・・所で項羽さん。力を貸してやるって言いましたけど・・・本当にいいんですか?それって俺や誰かに仕えることになりますよ?」

変わったとは言え、あの項羽が誰かに仕えることになる。普通に考えれば・・・あり得ない。

「・・・構わん、一度死んだ身だ。王としての誇りなどもう無い、一人の武人として戦おう」

・・・うーん、やっぱり歴史を知ってるからこの人が項羽とは思えないなぁ・・・。まあ、俺の世界とこの世界の「歴史」は少し違う

みたいだし仕方ないか。

「じゃあ、これからよろしくお願いします項羽さん」

「ああ、よろしくな北郷。で、これからどうする？」

「まずはこの洛陽を出ましょう。ここにいても何もできません」

「・・・そうだな、今の我々ではここにいても何もできん。他の場所に行った方がいいだろう」

悔しいがまだ地位も名声も力も無い俺達がどうこうした所でこの街は何も変わらないだろう。項羽さんを見ると手を強く握り締めていた。・・・不甲斐ない、そう思っているのだろう。

「・・・所で北郷、お前は予言を利用するつもりは無いのか？」

「・・・天の御遣いと最強の武神、それを使って人を集める、ってことですか？」

「そうだ。そうすれば手っ取り早く名をあげることはできる。それに伴い、兵士を手に入れることも可能だ」

「ですけど、そうすると俺達が動きにくくなります。天の御遣いや最強の武神の名を使うのは少なくともこの大陸を見回した後の方がいいです」

「・・・なら、その服は仕舞って置け。そんな服を着てれば自分が天の御遣いだ、と言ってる様なものだぞ？」

項羽さんの言う通りだ。最強の武神の特徴は強さを隠せばわからないが、天の御遣いの方はこの服を見られると下手すれば勘づかれてしまう。

「わかりました。後項羽さんの名前なんですけど・・・」

「そうだな、真名や項以外の名は捨てた方がいいだろう」

？何か今聞いたこと単語が出た様な・・・？「真名」だっけ？聞いた方が良さそうだ。

「あの・・・項羽さん。真名ってなんですか？」

「知らないのか？・・・違う国の者だから私達の様な風習は無いのか。なら、この場で覚えておけ。真名と言うのはその者の本質を表し、生まれた時に親に与えられるもう一つの名前だ。家族や本人が認めた者以外はそれを言うことは許されず、もし許可なく言えばその場で殺されても仕方ない程大切なものだ」

・・・聞いておいて良かった。もし聞かずに相手の真名を言っていればどうなってたことか・・・。

「ってことは・・・もしかして劉邦とか昔の時代の人達にもあるんですか？」

「ああ、当然私にもある。念のためもう一度聞いておくがお前には無いのだな？」

「・・・ここの風習に合わせるなら、一応下の名の一刀って名が俺の真名になります」

「!そうか、確か私は一度お前の真名を言っていたな。すまなかった」

項羽さんが頭を下げる。って!

「い、いいですよ!だから、顔を上げてください!」

「・・・しかし、私はお前の真名を許可なく言っている。なら私も自分の真名を言うべきではないか?」

「別に構いませんよ。俺達の国にはそういう風習はありませんから、気にしないでください」

「・・・わかった。ならもし私がお前に真名を預けたらその時は言っていいか?それまでは北郷と呼ぼう」

真剣な表情で俺を見つめる項羽さん。その様子から改めて真名がとても重要なものなんだなと理解できた。

「・・・わかりました。それでいいです」

「・・・すまない。所で北郷、お前も私の様に名前を変えた方がいいのではないか?」

「え?」

「真名が無いと言えばそれを怪しみ、そこからお前が天の御遣いだと気づかれるかもしれん。なら、旅を終えるまではお前の下の名を真名にし、別の名を入れた方がいい」

そっか・・・項羽さんの言う通りこっちの風習に合わせた方が気付かれにくいし、静かに旅をするならその方がいい。

「そうします。でもどういう名前にしましょう?」

「明日までに考えればいい。そろそろ日が暮れるころだ。続きは食事をとってからにしよう」

窓から外を見るともうすぐ夜になろうとしていた。結構長い間話していた様だ。

「そうですね。ご飯を食べてから一緒に名前を考えましょう」

「ああ」

この後、食事を終え、一晩かけて名前やこれからどう回るかを一緒に話し合う。

一体どんな人がいて、どんな出会いがあるのか。不安と期待が混ざった俺と彼女の大陸を巡る旅が始まろうとしていた。

第三話　確認、そして始まる旅（後書き）

項羽や一刀の新しい名前や色んな武将の真名を募集しています。後、大体決まってはいるんですが参考のためにどんな√が良いかという意見も出してくれると嬉しいです。

第四話　鍛練開始（前書き）

今週も二話投稿します。色々変な所があるかもしれませんが・・・
ご容赦下さい。

第四話　鍛練開始

「敵」の剣による突きが私に迫ってくる。私はそれを軽く避け、槍を振るう。「敵」はそれをかわし、今度は横から剣を振るった。それを最小の動きで避けつつ蹴りを叩き込む。

「ぐあっ！」

「休む暇はないぞ！」

「うわっ！」

「敵」は蹴りをまともに喰らったが体勢をすぐ立て直し、剣を構え突進しながら縦に振るう。それも簡単に避け、私は「敵」に向かって鋭い突きをかます。「敵」はそれを何とか防いだ。私は続けざまに「敵」の右肩目掛けて突きを出す。

「はっ！」

「くっ！」

それも何とか防いだ「敵」。だが、体勢が崩れ、隙だらけになった。私は止めの突きをーーー「敵」に当たる寸前で停止させ、こう言った。

「まだまだ甘いな、北郷」

そう「敵」の正体は北郷だ。私は今北郷に稽古をつけていた。まずはこいつの実力を知るために。

「項仁さんが強すぎるんですよ・・・」

「項仁」とは私の新たな名だ。昨日、北郷が提案した名で仁の心を持つ項羽だから「項仁」だそうだ。・・・まあ、悪くは無いな。

後、今の私は姓が項、名は仁、字が迅凄。最初は項仁として新たに生まれたで新生だったのだが、それだと怪しまれそうなので迅凄に、北郷は字が優心（優しい心の持ち主だから）になった。

・・・ちなみに優心は私が考えたのだが・・・言ったら北郷に変な顔をされた。・・・私がこんなこと考えるのがそんなに変か？まあいいか・・・北郷は私の事を知っているんだし仕方ないな。

「これでもかなり加減しているのだが？」

事実私はさっきの稽古では三割程度の実力しか出していない。だが、北郷は私に擦ることさえできなかった。

「もっと加減してくださいよ」

「それでは稽古にならんだろ。まあ、スジは悪くないのだが・・・全体的に足りない所が多い」

「例えばどんな所ですか？」

「そうだな、まず筋力がもう少し足りない。剣を振るう所か振らされていた時が稽古中度々あった、技もまだまだ未熟だ。後は攻撃が単純過ぎる。もっと虚実を入れるべきだな」

素質は決して悪くないのだが、未熟な点が多い。だが、防御だけは少しマシだった。

「・・・所で北郷、お前の防御のやり方は変わっているな。攻撃を受け止めるのではなく、攻撃を反らすとは・・・」

「まあ、俺の武器は耐久力が無いので・・・攻撃を受け止めたりすると武器が折れるんですよ」

「確かお前の武器は「刀」だったな。剣との様に力と重さではなく、鋭さと速さで斬る武器」

「はい。ですから耐久力が低く、そのため攻撃を「受ける」ではなく「反らす」必要があるんです。下手に攻撃を受け止めると刀が折れたりしますし」

一度北郷の刀を見せてもらった時、こんな細い剣で斬れるのか?と思ったが・・・北郷が物を斬った時は正直驚いた。見たことが無かったからな・・・。ちなみに稽古の時は刀ではなく洛陽で買った適当な剣を使うように言っている。稽古で壊れたらまずいからな。

「力による防御ではなく技による防御、面白いな。北郷私にもできるだろうか?」

「項仁さんなら出来ると思いますよ。何たって最強の武神なんですし」

「・・・最強か、正直あまり嬉しく無いな」

「何でですか?」

「・・・昔を思い出すからだ。力や自分こそが絶対だと信じて疑わなかった昔をな」

圧倒的な実力があるからこそ、他を軽く見てしまった。その結果、劉邦に負けた。あの時もっと周りを見ていれば、しっかりと臣下の忠告を聞いていれば負けなかっただろう。・・・今更後悔しても遅いがな。

「・・・じゃあ、もっと強くなれば良いじゃないですか」

「?どういう意味だ?」

北郷が言ったことがよくわからなかった。もっと強くなる?今の私は十分強いと言うのにか?

「今までの自分の過ち・・・心の弱さを受け入れて、ただ強いだけの「最強」から強さと心を持った「真の最強」になればいいんですよ」

「「真の最強」・・・か」

・・・今の私にはよくわからない。だが、北郷の言う力と心を持つ「真の最強」・・・その言葉の意味がわかった時、私はもっと強くなれるのだろうか?

「しかし北郷・・・私がこれ以上強くなる必要があるか?」

「ありますよ。少しでも強くなれば多くの人を守れるんですから」

「守る、か。だが北郷、お前はいずれその人を守るための力で人を殺さなければならない。その事もわかっているのか？」

「それは・・・」

・・・まだ人を殺していない北郷がこの質問に答えるのは辛いだろう。だが、自分で戦うと決めた以上、いずれ北郷も人を殺める時が必ず来る。その前に決断させた方がいい。

「・・・今はまだ答えられません。けど、一人でも多くの人を守るためなら・・・俺は戦います。例え、どれだけ苦しもうとも・・・」

私は北郷が言った台詞に驚く。「彼女」が言った台詞と同じだった。そして、今の北郷の目は・・・。

「・・・同じだ」

「・・・え？」

「今のお前は彼女と・・・劉邦と同じ目をしている。言ったことまで同じだった」

「俺と・・・劉邦が？」

私は一瞬北郷が劉邦に見えた。・・・まるで彼女と対峙した時の様だ。

「ああ・・・私は昔劉邦にもさっきのお前と似た様なことを言ったんだ。すると彼女も・・・お前と同じ返答をしていた。どれだけ苦しもうとも一人でも多くの人を守るために戦う、と」

つい私は微笑んでしまう。そして・・・私は同時に北郷が誰かに仕える様な人間ではないと言うことも理解した。彼女と同じ台詞を言う奴が誰かに仕える程度の人間になる訳がない。

「くくっ・・・」

「な、何ですかその笑い方・・・」

「さあな、強いて言えば・・・面白いものを見つけた。そんな所か」

「面白いもの？」

「ああ」

この旅・・・退屈しなくて済みそうだな。

「・・・何か気になるけど・・・別にいっか。後項仁さんこの後は・・・」

「お前の刀での素振りだ。最低でも一度に百回、それを一日五回はするんだぞ？後、今日は初日だから三回でいい」

「・・・多くないですか？合計で五百回ですよ？」

「馬鹿言え、足りんぐらいだ。それに今日は三百だ」

まず北郷は刀を自在に使いこなす必要もある。そのためには素振りが一番だ。後は筋力を鍛えるのと同時に刀の範囲を熟知するためだな。

「思った以上にきつそう・・・」

「止めるか？私は構わんぞ？」

「いえ！頑張ります！強くなるために！」

「いい根性だ、後明日から一日に稽古は二回するからな。勿論加減はしてやる」

「一日二回の稽古と合計五百回の素振り・・・生きてられるかな俺？」

「安心しろ。人はそう簡単には死なん」

「項仁さんが言っても全然説得力がありませんよ！」

・・・確かに、何十万という人を殺した私が言うことではないな。

「・・・まあ、それはともかく・・・これを毎日繰り返せば（嫌でも）強くなれる。実力を上げるためには何事も繰り返しが必要だ。私もそうだしな」

「・・・それは納得できますけど・・・話をずらそうとしましたよね？後、強くなれるの前辺りに何か言葉を付け足してませんでしたか？」

「・・・・・・・・・そんなことは無い」

「・・・しばらく間があった様な・・・」

「無い」

どうやら北郷はそこそこ感がいいようだ。

「それよりさっさと素振りをしろ。昼になるまでには終わらせろよ」

「いつの間にか時間が決められてる・・・しかも話を反らしてるし・・・」

「ぐだぐだ言う前にやれ。私も素振りしてくる」

「わかりました・・・頑張ります」

私は北郷から少し離れた場所で鍛練を開始する。さて・・・頑張れよ北郷。

「き、きつい・・・」

俺は項仁さんが言った通りに素振りをしているが・・・かなりきつい。何せまだ二百も振っていないのに腕が棒になりそうだ。初日がこれでは先が思いやられる。

「けど強くならないと・・・！」

項仁さん程ではなくても（絶対無理）強くなってみせる。多くの人

を守るためにーーー。

『お前はいずれその人を守るための力で人を殺さなければならない』

不意に項仁さんが言った台詞を思い出し、素振りが止まってしまう。確かに戦う以上、項仁さんの言う通り人を斬らなければならない時が来る。その時・・・俺はこの刀・・・「黄龍」を振るうことができるだろうか？

「・・・素振りに集中しよう」

今は鍛練に集中しないといけない。強くならなければ自分を・・・人を守ることなんてできない。

「ふっ！ふっ！ふっ！」

今俺の中にある迷いを吹き飛ばす様に刀を振るう。まだ二百も出来ていない、急いでやらないと。

それからしばらくの間、刀を振るった。そして、ようやく素振りが三百回に到達した。今何時ぐらいだろう・・・？

「いってー・・・腕がまともに動かない・・・」

それに豆ができた上に潰れてしまった。潰れた痕から強烈な痛みが出てくる。

「ふむ、しっかり素振りをこなしているようだな」

「項仁さん」

「豆が潰れたか、痛いだろうがそれでも素振りは続けろよ？」

「勿論です・・・いてて」

「・・・手を出せ」

「は、はい」

項仁さんの言う通り素直に両手を出す。すると彼女は俺の両手に包帯を巻き始めた。思ったよりも丁寧な巻き方で驚いた。

それにしても・・・これだけ近いと彼女の匂いを感じてしまう。想像していた様な血の匂いは一切なく、まるで花の様な匂いでドキドキしてしまう。目の前にいるのが元項羽とは言え、凄い美人なのだ。男なら誰でもこうなるだろう。

「終わったぞ」

「あ、ありがとうございます」

包帯はきちんと巻かれつつも手が動かしやすいようになっていた。以外と器用な人なのかな・・・？

「項仁さんって・・・包帯巻くの上手ですね」

「子供の頃から自分で巻いていたからな。私も鍛練し始めた頃はすぐにお前と同じように豆ができて、潰れた。その内血豆もできてそれも潰れたから自分で巻く必要があった」

「成る程・・・でも使用人に巻いてもらったりはしてなかったんですか？」

「ああ、これは自分でした方が安心できるからな。さてそろそろ昼食にしよう」

「はい」

昼食はちょっとした物にして、食べ終えて少ししてから歩き出す。少しでも早くあの村に着きたい。

「次の場所まで後どれだけかかりますかね？」

「さあな、私は地形のことはよく知らん」

「うーん。後どれだけかかるか見当もつかないか・・・」

「・・・すまん」

「あ、謝らなくてもいいですよ。俺も正確な場所はわからないんですから」

ただ、あの村は行き先は確かこっちの方角で合っていたはずだ。出来ればあの村には行っておきたい。

「所で北郷・・・私達が向かっている場所はどこなんだ？行き先はお前に任せているから、私はどこに向かっているのかわからん」

「・・・劉邦の末裔の一人が生まれ、今いる可能性がある村ですよ」

「!劉邦の末裔・・・是非会ってみたいものだな」

やっぱり項仁さんも興味があるようだ。まあ、俺もあるんだけど。劉邦の末裔にして、この時代の英雄の一人になる人物・・・劉備玄徳に。それにもしかしたら関羽や張飛に会う可能性もある。この世界の彼等・・・じゃなくて（多分）彼女達は一体どんな人物なのか・・・。

「・・・北郷もしかしてあの村が目的地か?」

「え?・・・多分あの村かと」

項仁さんがどこかの村を見つけ、俺もそちらを見るが・・・ここからだとよくわからない。

「とりあえずあの村に行きましょう。そろそろ日が暮れますし」

「そうだな」

ちなみにその村は・・・残念ながら目的の村ではなかった。それをわかると少し落ち込む俺達だが、すぐに気を取り直して村人に話を聞くと目的地はそこからもう少し離れた場所にあるようで、今日はもう夜になりそうなので宿で寝た。

ちなみに部屋はお金を抑えるため項仁さんと一緒の部屋だ。とは言え同じベッドで寝たわけじゃないけど・・・それでも同じ部屋のため少しドキドキしながらもゆっくり身体を休めた。

第五話　最初の実戦（前書き）

もう一話で、一刀の最初の戦闘です。次でようやく原作のキャラが出てきます。

第五話　最初の実戦

前の村を出て五日後、私と北郷は劉邦の末裔がいるかもしれないと言う村、桜桑村に向かっている最中で、今は北郷との稽古を一回終え、一休みしていた。ちなみに北郷は・・・。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・し、死ぬ」

疲労困憊と言った様子だった。まあ、身体中が痛いのに無理矢理素振りや稽古しているのだから、こうなっても仕方ないな。かといって一切手は抜かんが。

「一休みしたらさっさと歩くぞ。ゆっくり旅する時間もあまり無いのだろう？」

「だったら・・・もうちょっと・・・加減してくださいよ・・・」

「馬鹿言え、それとこれは別だ」

ちなみに稽古は悪い所を指摘しながらしている。その方がいいからな。

「はぁ・・・はぁ・・・本当に強くなれるのかな・・・？」

「安心しろ。少なくとも旅を始めた頃よりは強くなっている」

これはお世辞ではなく事実だ。思ったよりも北郷の筋が良く、一度悪い所を指摘するとたった数回繰り返すだけでそれを直していた。元々基本は出来ていた様で、この分だと一ヶ月もすればそこそこ戦

えるようになるな。少なくとも一般の兵ぐらいは軽くあしらえるだろう。

「それ・・・お世辞じゃないですよね・・・？」

「当たり前だ、それに私はそういうのは苦手だ」

自分で言うのもなんだが・・・私は頭を使う様な人間ではないからな。

「もう少し休憩したら行くぞ」

「は・・・はい・・・」

それから半刻経ってから、また歩き出す。休憩している間に北郷の体力も戻った様で普通に歩いていた。こいつ回復力が高いな・・・。もう少し鍛練や練習の量を増やすべきか？いや、無理のしすぎはよくないな。もうしばらくは今のままでいいだろう。

「所で北郷、これから会いに行く劉邦の末裔とやらは一体どんな人物だ？」

正直気になる。劉邦の子孫だからと言って、彼女の様に立派な人物とは限らんからな。

「えーと・・・確か礼儀と誠実、そして人徳を備えた優しき君主だったと思います」

「『思います』？どういうことだ？はっきりとわかっていないのか？」

「あ・・・え、えと、その・・・」

・・・何だ?急に慌て出したぞ?・・・怪しいな。

「・・・北郷、お前何か隠していないか?」

「・・・隠していません」

「なら、目を合わせた方がいいな」

私が問い詰めると同時に目を背けた北郷、間違いなく何か隠しているな。仕方ない、少し荒っぽいが・・・。

「北郷、正直に言え。さもなければ鍛練や稽古の量を十倍に増やすぞ」

「・・・・・・・・怒りませんか?」

「正直に言えば許してやる」

「あの・・・、言う前に一つ確認したいんですけど・・・」

「なんだ?」

「劉邦って・・・女性ですか?」

「・・・は?」

何言っているんだ北郷は?そんなのーーー待てよ。そういえば最初

に私が名乗った時やけに驚いていたな・・・まるであり得ないと言った様子で、それに今の質問・・・。まさか?

「・・・北郷、まさかと思うが・・・私は男として本に記されているのか?」

「・・・はい」

「・・・・・・・・・北郷、私が男に見えるか?」

「・・・・・・・・・見えません。どう見ても女性です」

「だったら何故私が男として本に記されている!?」

「お、落ち着いてください!!」

「確かに私は男勝りな所はある!だが、だとしても何故男になっているんだ!?」

理不尽だ!私の犯した罪はそこまで重いものなのか!?・・・いや、待てよ。確か北郷は劉邦が女性かどうかと聞いていたな。もしや・・・。

「・・・北郷、まさか劉邦も男になっているのか?」

「・・・はい。あの・・・張良や韓信、范増・・・その他の武将達もそっちでは女性なんですか?」

「・・・ああ、全員女だ。彼女達も本では男なのか?」

「・・・はい」

「・・・何故だ？」

ここまで違うと流石に私でも変だと勘づく。一人や二人ならともかく、全員の性別が違うのはいくらなんでもおかしい。

「その・・・、どうもこっちとそっちの『歴史』が違うみたいなんです。こっちの歴史では項仁さんや劉邦達は全員男なんですけど・・・」

「・・・私達の方は全員女か。正反対だな」

「はい・・・。多分ですけど・・・」

この後、北郷から時間をかけて説明された。どうもこの世界は北郷の世界とは違うらしい。こいつが言うには多分この世界は北郷が知っている武将達のほとんどが女になっている世界だそうだ。だから、今から会いに行こうとしている人物が本当に歴史通りの人間なのかわからないそうだ。

ちなみに何故最初にこの事を言わなかったか聞くと・・・女性なのに男として記されているなんて言ったら殺されると思ったそうで、だから誤魔化したそうだ。・・・納得だな。

信じられない話だが・・・いい加減慣れたな。そもそも私が生きていることやその私が四百年後に来ていること自体があり得ないからな。しかし・・・。

「北郷、この世界とお前の世界が違うなら・・・何故お前はこの世

界に来たのだ？」

「・・・そこなんですよ。もし、普通に過去に来たとしたら歴史通り項仁さんは男のはずなんです」

「・・・なのにお前達の歴史とは性別が正反対になっている世界に来てしまった、か」

「・・・はい、そもそも何故項仁さんが生きているのか・・・後、俺達の歴史ではこの時代に天の御遣いや最強の武将なんて存在もそれについての予言もありませんでしたし・・・」

「・・・謎だらけか。はあ、私は頭を使うのは得意ではないし・・・お前はどうだ？」

「俺もあまり・・・、だから管輅を探す必要があるんです」

成る程な・・・何故本来存在しないはずの私達についての予言をしたのか？ただの予知しただけなのか、それとも私達のことを知っているのか。いずれにせよ、管輅に会って聞くしかない。

「ふむ、改めて目的を確認した所で・・・また歩くとするか」

「はい」

話を終え、再び歩き出す。それから一刻程経つと・・・村が見えてきた。

「あれか北郷？」

「間違いありません。行き先も距離もさっきの村で確認しましたし」

「・・・もうすぐか」

もう少しで劉邦の末裔に会える。正しく言えば末裔の一人だが、歴史を知っている北郷が会いに行く以上、相当な人物なのだろう。・・・歴史通りであれば、だがな。

「・・・ん?」

「どうしました?」

これは・・・血と焼けた臭い?それによく見れば煙も出ている。まさか・・・?

「・・・急ぐぞ北郷。おそらくあの村は今賊に襲われている」

「え!?」

私は一気に走り出す。北郷もすぐに後を追い、村の入り口に到着すると・・・。

「・・・酷いな」

予想通り村は賊に襲われていた。すでに何人もの村人が殺されている。北郷がその光景を目の当たりにすると、一瞬嗚咽を出しそうになっていた。・・・無理もないな。私は辺りを見回し、賊達を発見した。かなりの数だな、おそらく百はいるだろう。あそこだけであの数ならもっと多くの賊がいるな。

「・・・今から戦うぞ北郷」

「・・・はい」

「・・・もう一度だけ問うぞ。戦うか？」

北郷は一瞬だけ躊躇った表情をするが・・・。

「・・・はい！！」

決意の籠った言葉を発し、刀を抜いた。

「・・・そうか、躊躇ったりするなよ」

「・・・勿論です」

「では行くぞ！！」

私と北郷は同時に賊達に向かって突撃する。不意を突かれ、隙だらけとなった賊の一人に槍を突き刺した。

「な、なんだてめえら！？」

「賊に名乗る名は無い！！」

賊達の中に入り込み、今度は槍を薙ぎ払う。それで数人が即死、そしてまた一人別の賊を突き殺す。

「こ、こいつ強えぞ！」

「あ、相手は一人だ！囲めば何とかなる！」

「私が囲む隙を与えるとでも？」

包囲しようとした数人を先に突き、また薙ぎ払う。それを淡々と繰り返し、あっという間に数十と言う数の賊が死んでいった。北郷は・・・向こうにいた。今は数人の賊と戦っていた。それを見て私は別の場所に向かう。あれは北郷の戦いだ、私が手出しする理由は無い。一度戦場に出れば仲間が助けてくれると言う甘い考え等無い。いざとなれば自分の身は自分で守る、それが戦場だ。・・・死ぬなよ北郷。

「はあ・・・はあ・・・」

俺は「黄龍」を構え、賊達と対峙する。賊の一人が俺に向かって突きを放つが・・・項仁さんに比べれば止まって見える。それを軽々かわし刀を相手に向かってーーーそこで俺の手が止まった。

このまま刀を振るえば間違いなく相手は死ぬ。項仁さんは躊躇うなと言ったが、賊とはいえ彼等も人だ。もしかしたら生きるために仕方なく賊になったのかもしれない。彼等だって被害者かもしれない。そう思うと・・・刀が止まってしまう。

「なんだこいつ？」

「もしかして、人を殺したことが無えのか？」

「だったら好都合だ！殺っちまえ！」

数人がかりで襲いかかる賊達の攻撃を何とか防ぐ。けど、このままだといつか殺られる。でも刀を振りきることができない。相手に当たる寸前にさっきと似たような考えが全身を駆け巡り、手が止まってしまう。

「なんで・・・なんでこんなことをするんだよあんた達は！？」

「はあ？そんなの・・・酒や女を手に入れるために決まってるだろ」

「なっ！？そのために人を殺したのか！？」

「あったり前だろ。他人がどうなろうが知ったことか。自分が良ければそれでいいんだよ！」

ふざけるな・・・！生きるためならまだしも、そんな理由のためだけに罪の無い人達を殺したのか・・・！！

俺の心を徐々に怒りが支配していく。さっきまでの躊躇いがどんどん消えていく。こいつらに生きている価値なんて無い。だから・・・！

「じゃあ、さっさと死ねよ小僧！」

「・・・」

賊の一人が振るった剣を避け・・・隙だらけになった相手を「黄龍」で切り裂いた。切傷から鮮血が飛び散る。

「て、てめえ！」

そこから先は・・・身体が勝手に動いていた。相手の槍を掴み、別の相手に突き刺す。それを見て呆然としていた賊も斬り殺す。残った賊達は怒り狂いながら剣や槍を振るうが、あの人と比べれば児戯の様なものだ。

突いてきた相手の槍を横から思いっきり叩く。槍を手放した相手に向かって突きを喰らわせる。残りは四人。俺の身体はあいつらの懐に潜り込み、刀で横一直線に切り裂く。そして、残りは一人となった。

「く、来るなぁ！！」

最後の一人は腰を抜かし、みっともない格好になっていた。それを見て俺は徐々に平常心を取り戻し・・・自分が何をしたのか・・・はっきりとわかった。人を殺した、怒りに身を任せ、何人もの人を殺めた。

「はぁ・・・！はぁ・・・！はぁ・・・！」

急激に呼吸がしづらくなった。動悸が不定期になり、頭がくらくらし始める。周囲の死体が、「黄龍」や死体にベットリ付いた血が俺に人を殺したのだと告げているようだった。

「ぎ、ぎゃあああっ！！」

さっきの賊の悲鳴が聞こえた。そっちを見ると・・・項仁さんが槍でその賊の身体を貫いていた。槍に付いた血を払い、俺に近づく項

仁さん。

「・・・終わったぞ」

俺はその言葉を聞くと同時に強烈な吐き気が俺を襲う。思わず「黄龍」を手放し、どこか人がいない場所に移動し、吐いていた。

「おえぇぇえええっ！！」

俺は・・・人を殺した。しかも一人じゃなく何人もの人達を。その事実が・・・俺に襲いかかる。

「うっ・・・！」

吐いたばかりなのにまだ吐き気がする。辛い、怖い、これが・・・戦い。命をかけた殺し合い。

「・・・大丈夫か？」

「・・・項仁・・・さん」

「・・・ほら、肩を貸してやる」

彼女に支えられ、俺は適当な場所に座る。

「・・・お前の刀だ。ちゃんと持っておけ」

項仁さんからさっき手放した「黄龍」を渡される。刃を見ると血が拭き取られていた、おそらく彼女がしてくれたのだろう。それを鞘に納める。

「・・・血はできるだけ早く拭き取っておけ、刃が錆びる元になる」

「・・・わかりました」

俺も彼女もしばらくの間、ただ黙っていた。そうすると項仁さんの方から話しかけてきた。

「・・・怖いか？」

「・・・はい」

「・・・だろうな。最初は誰でもそうなる。余程狂っている奴以外はな。・・・人を殺めたことを後悔しているか？」

「・・・」

「・・・一つ言っておく、後悔した所で何も変わらん。お前が人を殺した事実は消えんし、殺した者が生き返ることもない」

・・・その通りだ。俺がいくら後悔しても・・・あの人達はもう動かない。死んだのだから、俺の・・・せいで。

「・・・北郷、改めて聞くぞ。お前は戦えばその度にこんな苦しみを受けることになる。それでも・・・戦いたいか？」

「・・・・・・」

「・・・武将以外にも活躍する手はある。・・・文官や軍師として働くという方法もあるんだぞ？」

確かに文官や軍師としてなら人を自分の手で殺めることは無い。特に俺の知識は未来からもののため、かなり役に立つだろう。けど・・・。

「・・・俺はいずれ・・・天の御使いとして戦う以上、俺のせいで死ぬ人は必ず出てきます。なら・・・」

「・・・せめて自分の手で、か？傲慢だな」

「・・・そう言われても構いません。でも・・・俺自身が戦うことで一人でも多くの人を助けられるなら・・・戦います。どんなに苦しもうとも・・・！」

この考えを貫く以上、これから先もっと苦しむだろう。もしかしたら、途中で挫折するかもしれない。それでも・・・死んでいった人達や殺した人達の命を背負って生きていく、この世界を変える、それが俺の答え。

「・・・ふう、本当に甘いやつだな。まったく、・・・天華だ」

「・・・え？」

「・・・天の華で天華、それが私の真名。北郷お前に預ける」

天華・・・それが彼女のもう一つの名前・・・。

「で、でもいいんですか？」

確か真名は自分が認めた者にしか預けないはず・・・。

「構わん、お前を認めたから預けたのだ。誇りに思えよ?」

「・・・はい、わかりました。天華さん」

「『さん』はいらん。後、もう敬語を使わなくていいぞ?別にため口になっても斬ったりしないから、そろそろ普通に話せ」

「あはは・・・えーと・・・天華」

「それでいい。後・・・」

急にそわそわし始める天華、理由は何となくわかる。彼女が俺に真名を預けてくれたのだから、こっちも言おう。

「俺の真名は一刀だ。よろしくな天華」

「(ほっ)ああ、よろしく一刀」

やっぱり最初のことをまだ引きずっていたんだな。さて・・・彼女と話している間に俺もだいぶ楽になってきた。村の人達の様子や現状を確かめておこう。

「所で天華・・・まさか一人で賊達を全員片付けたのか?」

「いや、私だけじゃない。後二人いた。確か名前は・・・関羽と張飛だったか?後その二人が守っていた人物・・・劉邦にそっくりな女もいた」

「その人だ。多分その人が俺の会いたかった人物・・・劉備玄徳」

「・・・会う価値があるのか？」

「？どういうこと？」

「私はさっきあの女と少し話したが・・・お前の言うような人物ではないと思うぞ」

何故か天華は嫌な顔をしていた。まるで失望したかの様な・・・。

「俺はとりあえず会ってみたい。こっちの劉備が一体どんな人物なのか知りたいし・・・」

「・・・わかった、こっちだ。付いてこい」

天華に案内され、俺は劉備、関羽、張飛がいる場所に向かった。

第六話　桃園の三姉妹（前書き）

今週は一話だけです。次からも大体週に一話ぐらいだと思います。
調子が良ければ二話ぐらいです。

第六話　桃園の三姉妹

村を襲った賊達を片付け、天華から真名を受け取った後、俺は彼女の案内で劉備、関羽、張飛がいる場所に向かっていた。

「・・・あの三人だ。確か黒髪が関羽、ちっこいのが張飛、そして・・・」

「・・・あの人がこの世界の劉備玄徳」

桃色の髪で胸を大きい女性。・・・そういや、天華も胸が大きかったよな・・・。

「・・・一刀、やましいことは考えるなよ？」

「か、考えてないよ」

相変わらず勘が鋭い・・・ちらっと頭によぎっただけなのに感知するなんて・・・。と、とりあえず彼女達と話してみるか。俺達が彼女達に近づこうとすると・・・向こうから近づいてきた。

「あ、あの！さっきは助けてくれてありがとうございます！」

「・・・大したことではない」

「？どういうことだ天華？」

「さっきこのお姉ちゃんが桃香お姉ちゃんを助けてくれたのだ」

「・・・正確に言うと彼女が賊に捕まっていたのを助けた。それだけだ」

成る程・・・って劉備捕まっていたのか？何してんるだよ・・・もしかしてそれが天華の失望したかの様な表情をした理由？いや、違うな。確か天華は『さっきあの女と少し話したがお前の言うような人物ではないと思うぞ』って言ってた。つまり・・・天華を失望させた理由は彼女の言った台詞ってことになるな。

俺が考えていると劉備達も天華の隣にいる俺が気になった様で聞いてきた。

「・・・あの貴方は・・・？」

「ああ、ごめん。そういや名乗って無いね。天華は？」

「・・・まだだ」

「俺は姓は北、名は郷、字は優心だ。ほら天華」

「・・・姓は項、名は仁、字は迅凄」

俺達が自己紹介すると彼女達も名乗る。

「私は姓は劉、名は備、字は玄徳って言います」

「私は姓は関、名は羽、字は雲長と申します」

「鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

・・・一人明らかに真名を言ってるよな?まあ、いいや。お互い自己紹介を終えると劉備が天華の名前のことについて質問してきた。

「あの・・・項仁さんの『項』って・・・もしかしてあの項羽の親戚なんですか?」

「・・・名前が一緒なだけだ。詳しくは知らん」

・・・まさか項羽本人とは言えないからなあ・・・。それに言った所で信じる筈がないし・・・。

「そうですか・・・あの、項仁さん。さっきの返事を聞かせてくれませんか?」

「・・・さっきの返事?」

「・・・私達に協力してほしい、だったな」

そういうことか。まあ、天華の武を見て何も言わない奴はいないよなあ。

「はい。さっきは連れがいるから一度会話を中断するって言って項仁さんが去ったので・・・返事を聞けなかったんです」

・・・多分、天華は俺が彼女に会おうとしなかったら・・・そのままこの村を離れていたんだろな。俺が彼女に会いたいと言ったから仕方なくいるって感じだし。

「項仁さんと・・・後、北郷さんにも協力してほしいです。私達の

理想を叶えるために・・・どうかお願いします！」

「俺にも？」

「はい！」

天華を引き入れるためーーーってことじゃなさそうだな。多分天華と一緒にいるから俺も相当強いって思っているんだろう。・・・実際はそんなに強くないけど。

「・・・劉備、もう一度聞く。お前は何故私の・・・いや、私達の力を欲する？」

天華が劉備に問う、多分・・・今から話すことが天華が失望した理由だ。

「勿論・・・話し合うことで皆が笑って暮らせる世界を作るためです！」

・・・そういうことか、だから天華は彼女に失望していたのか。

「・・・甘いよ劉備さん」

「・・・え？」

「・・・一刀の言う通りだ。甘い、甘すぎる。そんなことでこの大陸に平和をもたらす等不可能だ」

「で、でも一生懸命話し合えばいつか必ずーーー」

「・・・だったら何故私達の力を欲する?話し合うことで平和をもたらしたいなら力等不要だろう」

「そ、それは・・・」

天華の指摘に言葉が詰まる劉備、彼女の言う通り話し合うことで戦を無くしたいなら力なんて必要ない。天華を引き込もうとしている時点で既に矛盾している。

「貴様等・・・!黙って聞いていればさっきから桃香様の理想に難癖ばかりつけおって!恩人とその連れとは言えこれ以上は許さんぞ!」

「・・・やれやれ、事実を言ったら逆ギレかよ・・・」

「・・・くだらん。やはり、お前らに力を貸す等あり得ないな。現実も見えず覚悟も無い奴等に私達が協力する価値があるとは思えない」

「貴様ぁ!!」

天華の一言で堪忍袋の緒が切れた関羽が俺達に向けて青龍偃月刀を振るおうとするが、その前に天華が目にも止まらぬ速さで槍を振るい、弾き飛ばし関羽の喉元に槍を突き付けた。

「・・・弱い、怒りに身を任せた攻撃等私には通用しない」

「くっ・・・!!」

「愛紗ちゃん!!」

「愛紗から離れるのだ！！」

「・・・私は元からこいつを殺すつもりは無い。こいつが攻撃してきたから対処しただけだ」

直ぐ様槍を下げる天華、凄いな・・・まったく見えなかった。気が付いたらもう関羽に槍を突き付けていた。これは多分天華の・・・覇王の実力のほんの一部、その気になれば今頃関羽は間違いなく死んでいた。

「おのれ・・・！さっきは不意を突かれたが今度はーーー「愛紗ちゃん！！」桃香様！？」

「さっきから失礼だよ！私達は項仁さんや北郷さんに頼んでいるのにそんな態度は！！」

「し、しかし・・・この二人が桃香様の理想を馬鹿にしたから・・・」

「馬鹿にしたつもりは無いよ。ただ、俺達は甘いって言っただけだ」

「・・・どういうことですか？」

「確かに劉備さんの言う通り、話し合うだけで平和にできればそれが一番良い。でも・・・それは不可能なんだよ」

「・・・力ある者が力無き者の言葉に耳を貸す筈がない、地位も名声も力も無い今のお前らがそう言った所でただの戯言にしかならない。それに・・・話し合った所で解決するとは限らん。相手には仕

方なく戦っている奴もいれば、ただ自分の欲のために戦っている奴もいる、この村に襲ってきた賊達もそうだろう。そんな奴等を相手に話し合いで解決すると思うか？現に私達はさっきの騒動を言葉ではなく力で収めただろう？」

「どんな理想も力が無ければ達成することは絶対にできない。そして、戦う以上は・・・どうしても犠牲は出る。その事をわかっているのかい？」

「それは・・・」

どんなに頑張った所で一人の犠牲も出さずに平和にすることなんてできない。・・・できるはずが無い。

「では・・・何故貴様等は戦うのだ！！」

「俺は・・・一人でも多くの人を助けるために戦う。そのためなら・・・どんなに苦しんでも構わない」

「私は一刀の理想ではなく・・・覚悟を認めたからこそ、一刀と共に戦うことを決めた。この大陸に平和をもたらすために」

俺の理想も彼女同様甘いものだってのはわかっている。けどそれを自分で理解し、果たすための覚悟、それがあるからこそ天華は俺を認め、俺に真名を預けてくれた。

「・・・覚悟」

「そう、君達にはそれが無い。ただ話し合えば済む、そんなことしか考えていない今の君達に理想を叶えることは絶対できない」

「本当に話し合うことで平和にする世界を作りたいのなら・・・力を持つことだ。相手を圧倒する力を手に入れ、話に持ち込む、そうすれば平和にできるだろう。・・・そうなるまでは戦わなければならない。当然、その間に多くの命が失われるがな」

「その人達の命を背負う覚悟が・・・君にあるのかい？」

全部言い終わると・・・劉備達はうつ向きながら黙ってしまった。そこまでの覚悟が無かったのだろう。そして、しばらく沈黙が続き・・・劉備が顔を上げた。

「・・・北郷さん、項仁さん」

「・・・何？」

「・・・なんだ？」

「お二人の・・・言う通りです。私には何の覚悟もありませんでした。ただ話し合えばそれで解決する、それしか考えていませんでした。けど・・・それでも！」

さっきまでとは違う決意の籠った表情で俺達を見つめる劉備。

「私は話し合うことでこの大陸に平和をもたらす、この考えは変わりません！そのために戦います！」

「・・・それって矛盾していない？」

「確かにな、話し合うために戦う。矛盾としか言い様が無い」

「わかってます。けどそれはお二人と同じでしょう?助けるために戦うんですから」

思いもしない劉備の言葉に少し呆気に取られた俺達。

「・・・一本取られたな」

「・・・そうだな。くくっ」

「・・・北郷さん、項仁さん、改めて言います。私達の理想を叶えるために・・・そしてこの世界を平和にするために協力してください!」

現実を見ることが出来、覚悟のある今の彼女なら・・・協力する価値はあるだろう、だが。

「・・・ごめん、それはできない」

「!?な、何故ですか!?」

「・・・私達は今この大陸を巡る旅をしている。それが終わるまでは・・・誰かに付く気は無い」

「そうだったんですか・・・それなら仕方ありませんね・・・」

俺達の返答に少しショックを受けながらも、潔く諦める劉備。彼女には悪いけど・・・俺達は旅が終わるまで誰かに付くことは絶対に無い。

「けど・・・、もし旅が終わって俺達が他の誰かに仕える気が無かったら・・・その時は協力してあげるよ」

「ほ、本当ですか！？」

「・・・まあ、私達が自分で旗揚げする可能性もあるがな。その場合は・・・」

「容赦なく君達を倒す、わかったね？」

「・・・はい！でもいつか必ず皆で手を繋ぎ合いましょうね！」

「そうだな、頑張ってそんな世の中にしよう」

「・・・最後まで甘い奴・・・いや、奴等か。（まあ、少しは見直してやるとしよう）」

どうやら天華は彼女を少し見直した様だ。かと言う俺もそうだけど、さっきまでの劉備はただ甘いだけの人物だった。でも今は・・・俺が知っている劉備玄徳と同じ立派な理想と覚悟も持つ人物だ。彼女がこれから英雄の一人になれるどうか・・・楽しみだな。できれば一緒に戦いな、・・・できればだけど。あ、そうだ。

「劉備、これあげるよ。君達が旗揚げする時に役立ててくれ」

俺は持っていた資金の半分を彼女に手渡す。

「こ、これ、お金・・・しかもこんなに・・・い、良いんですか？」

「うん、遠慮なく受け取ってくれ」

「あ、ありがとうございます！」

「・・・一刀、お前な・・・」

「良いじゃないか天華。あれだけの金だと、どうせ俺達二人だけじゃ余るんだし。それに足りなくなったら稼げばいいだろ？」

「まったく・・・本当にお人好しだなお前は」

「ごめん」

やれやれと溜め息を吐く天華。でもなあ・・・俺達が持ってた資金は実際かなりの量で旅をするだけなら半分あれば充分過ぎる量だったし・・・。

「・・・まあいい。所で一刀、次はどこに行く？」

「えーと、ここからだと・・・」

「あ！確か白蓮ちゃんのいる幽州が一番近いですよ」

「？誰だそれは？」

「幽州と言えば・・・公孫賛が治めている場所だっけ？」

「はい！白蓮ちゃんは同門で昔盧植先生の元で一緒に学んでいたんです！」

「・・・あのさ、公孫賛さんや盧植さんって、どんな人？」

多分天華や劉備達同様女の人なんだろうけど・・・。

「え～と、盧植先生は優しくて面倒見がいい女性で・・・白蓮ちゃんは・・・普通？」

「「・・・はあ？」」

おお、天華とハモった。それはともかく、普通って何だ？まさか何の特徴も無い影の薄い人って事か？

「何て言うか・・・ただ、普通って感じの人なんだよね～白蓮ちゃんって。何でもこなせるんだけど・・・あくまでそれだけって感じ」

「そ、そう・・・」

「と、とりあえず・・・次の行き先は幽州にした方がいいな」

・・・何故かこれ以上聞いてはいけない気がする。話をさっさと切り上げる事にした。

「じゃあ、もう行くか」

「そうだな、少しでもーーー「あ、あの！」・・・何だ？」

「今日はもう遅いですし・・・私の家に来ませんか？助けて頂いた件とお金を貰った件のお礼をしたいですし・・・」

彼女の家か・・・。ふと空を眺めると日が暮れようとしていた。明日になってからここを発ってもいいかもしれないな。それにもしか

したら劉備の母親に会えるかもしれない。

「・・・どうする天華？」

「・・・一刀が決めろ。私はどっちでもいい」

「・・・じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ」

「はい！こっちです！」

劉備の案内に従って彼女の家に向かう。少し楽しみだな。女とは言えあの劉備の家だし。ちらっと天華の方を見ると・・・別にどうでもよさそうな顔だった。俺と違ってあまり興味は無いらしい。ちなみに歩いている最中、関羽が俺と天華をじっと睨んでいた。・・・言いたい事があれば言えば良いのに。

「ここです！」

「ここか・・・」

「・・・普通だな」

まあ、劉備は他の末裔達と違って裕福な生活はしてないからなあ。

「どうぞ！」

「失礼します」

「・・・失礼する」

「あら、お帰り桃香、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん。・・・？その二人は・・・？」

俺達が家に入ると同時に家の奥から誰かが出てきた。劉備と同じ色の髪・・・もしかして？

「劉備さんのお母さん？」

「はい！お母さん、この人達は北郷さんと項仁さん。今日ちょっとお世話になったから家に泊めてようかなって思って」

「・・・『項』？まさかあの項羽の・・・？」

「いや、名が一緒なだけだ。私はよく知らん」

「そうでしたか、怪しんですいません。そっちの方の名は確か北郷さんでしたね。少し変わった名前ですね」

「よく言われます」

俺達を少しの間じっと見つめる劉備のお母さん。俺はその間落ち着かなかった。・・・まさかばれてる？俺がそう思うと劉備のお母さんがニコッと笑った。

「ゆっくりしていってくださいね。北郷さん、項仁さん。すぐに料理を作りますので」

「は、はい」

「・・・はい」

そう言うと劉備のお母さんは部屋の奥に戻った。

（・・・どう思う天華？）

（・・・怪しんではいないが気になっていると言った所だな。どうやら人を見る目はかなりあるようだ）

・・・泊まったのは少し失敗だったかもしれない。できれば静かに旅をするつもりだったんだけど・・・大丈夫かな？

その後劉備のお母さんが作った料理を食べ終え、今俺と天華は外で稽古をしていた。

「ふっ！」

「くっ！」

天華が繰り出した突きを剣で反らし、近づこうとしたが、天華の蹴りで阻まれる。天華の戦法は槍と体術のコンビネーション、おそらく槍が無くても素手で戦えるのだろう。

「どうした？防ぐので精一杯か？」

「まだまだ・・・！」

俺が天華に向かって突撃しようとすると・・・。

「精が出てますね。北郷さん、項仁さん」

声をかけられた、そっちの方を向くと・・・劉備のお母さんがいた。
天華もそれを確認すると稽古を中断する。

「・・・何の用ですか？」

「あらあら、警戒しなくて良いですよ。貴方達と少しお話がしたいだけです」

「・・・お話？」

「はい、率直に言います。貴方達は『何者』ですか？」

「・・・何を言っているんですか？」

「そのままの意味ですよ。珍しい名を持つ者と項羽と同じ『項』の名を持つ者、気になるのは当然でしょう？」

「・・・どこにでもいる『普通』の人だ」

「『普通』の人が愛紗ちゃん程の実力者を軽くあしらえますか？桃香から聞きましたよ。一瞬で彼女を無力化したと」

・・・誤魔化せる様な人じゃないな。けど、ここで言うわけにもいかない。・・・どうする？

「ふふっ、大丈夫ですよ。ここには今私達だけしかいませんから」

「・・・嘘ではないな、周りに人の気配が無い。どうする一刀？」

「・・・劉備さん達には黙ってくれるなら言います」

「わかりました」

この人・・・かなりの曲者だな。わざと自分一人でここに来ることで俺達に話しさせようとしたんだろう。

「俺は・・・今この大陸中に広まっている予言の・・・天の御使いと呼ばれ、この大陸以外の場所から来た者です」

「・・・成る程、だから変わった名前をしていたのですね。と言うことは・・・」

「・・・私が最強の武神と呼ばれる者だ」

「やはりそうでしたか。しかし、何故それを隠しているのですか？」

「天の御使いと最強の武神としてではなく、俺達個人としてこの大陸を見るためです。後・・・」

「・・・私がしなければならないこと、それを成すためだ」

「そうでしたか・・・で、どうですか？桃香は？」

「・・・悪く言えば理想ばかりの甘い人、良く言えば礼儀と誠実さを持つ優しい人です。どちらにせよいずれ大成する人物ですね」

まあ・・・人のことあまり言えないけど。自分の理想もかなり甘いし。

「そう言って頂けると母として嬉しい限りです」

本当に嬉しそうに微笑む劉備のお母さん。やはり我が子が評価されているのは嬉しいのだろう。

「所で・・・本当に誰にも言わないのか？」

「・・・どういうことですか？」

「・・・わかっている筈だ。私達がいれば彼女の理想を叶えるための近道になる、と」

「・・・ですが貴方達はこの大陸を回るまで誰かに付く気は無いのでしょう？なら、言った所で無駄なだけです。寧ろ、貴方達を遠ざける結果になります。それなら・・・」

「・・・いっそのこと言わない方が良い、か。確かにそうだな。疑ってすまない」

「いえ、こちらがいきなり話しかけてきたのですから疑って当然でしょう。ただ・・・できればあの子と共に進んでほしいものです」

「それは・・・俺達の旅が終わった後に決まることです」

これからの旅で一体どうなるか・・・まだわからない。もしかしたら他の誰かに付くかもしれないし、自分で旗揚げするかもしれない。劉備達と共に戦うのかもしれない。それを決める為に旅をしているのだから。

「・・・そうですね。貴方達の旅が無事に終わります様に」

「ありがとうございます」

「・・・感謝する」

「では失礼します。そろそろ寝た方がいいですよ」

「はい」

「わかった」

すぐに劉備のお母さんは家に戻り、俺達が残った。残った俺達を月が照らしていた。

「・・・今日はもう終わりにするぞ。いいな？」

「うん、・・・天華」

「なんだ？」

「・・・あの人を羨ましそうに見詰めていたけど・・・どうしてだ？」

「・・・・・・母上と伯母上を思い出したからだ」

「あ・・・ご、ごめん！」

確か項羽の両親は歴史だとすぐ亡くなったため、叔父の項梁に養われていた筈だ。その叔父も章邯の手によって亡くなり、残ったもう一人の叔父項伯、従弟の項荘もこの時代にはもういない。つまりこの世界の項羽である天華は・・・天涯孤独だ、それなのに俺は・・・

。

「・・・ふふっ、安心しろ一刀。私は寂しかったりしていない」

「・・・本当か？」

「・・・まったくではないがな、確かに私の家族はもういないが・・・今はお前と言う仲間がいる。だから、寂しくないさ」

そう言って俺に微笑む天華、その笑顔と月の光が合わさって・・・とても美しかった。

「あ、ありがとう・・・」

「？何故顔が赤くなる？」

いやだって・・・さっきの笑顔を見たら、男なら・・・いや女でも関係無くこうなるよ。反則だよあれ。

「な、何でもないよ」

「・・・そうか？少し顔が赤いが・・・」

俺に近づき顔を覗き込む天華。ち、近いって！

「だ、大丈夫だよ！ほ、ほら、もう寝ようぜ！」

「あ、ああ・・・」

直ぐ様劉備の家に戻り、寝ようとしたが・・・あの時の笑顔が頭か

ら離れず、まともに寝ることができなかった。

次の日の早朝は天華に叩き起こされ、ご飯の前にいつもの稽古をした。勿論結果は・・・惨敗。それが終わって朝食を食べ終え、今は村の入り口にいた。

「さてと・・・そろそろ行くか」

「ああ」

「気をつけてくださいね。北郷さん、項仁さん」

「気をつけるのだ」

「ありがと」

「・・・言われなくてもそのつもりだ」

劉備と張飛が俺達を見送ってくれた。関羽は?と聞くと・・・鍛練しているらしい。多分昨日天華に負けたのが口惜しくて鍛練してるんだろな。後、彼女達はもうしばらくこの村にいるらしい。

「確か、あっちが公孫賛さんがいる幽州だったよね?」

「はい、ここからだと大体三日か四日程掛かります」

となると、稽古や鍛練を含めても・・・到着には遅くて五日ぐらいか。

「じゃあね。劉備さん、張飛ちゃん」

「む～！鈴々は子供じゃないのだ！だから『ちゃん』はいらないのだ！」

「あはは、ごめんごめん」

どうやら張飛は子供扱いされるのは嫌らしい。でもどう見ても子供だよなぁ。て言うか、いくら別の世界と言ってもあの張飛がこんなちびっこことはとても思えない。

「あ、あの北郷さん、項仁さん。その・・・お二人に私の真名を受け取ってほしいんですけど・・・」

「え？」

「何？」

「・・・昨日二人が言ってくれたおかげで私は自分の未熟さを知ることが出来ました。それにもしかしたら一緒に戦うことになるかもしれません。ですから真名を預けたいんです」

「・・・だが、敵になるかもしれんぞ？」

「そ、その時は・・・その時です！」

「ぷっ・・・あはは！」

「わ、笑わないでくださいよ～！」

天華に言われ、それを思い出す劉備。すっかり忘れていた様だ。

「ごめん・・・。で、本当にいいの？」

「勿論です！私の真名は桃香です！受け取ってください！」

「ありがとう、俺の真名は一刀だ。受け取ってくれ桃香」

「はい！一刀さん！」

こうして俺と桃香は互いの真名を預けたが・・・。

「・・・私は断る」

「「えっ！？」」

何故か天華は拒否していた。なんでだ・・・？

「ど、どうしてですか・・・？」

「・・・私はまだお前を完全に認めた訳では無い。故に受け取るつもりは無い」

「そうですか・・・」

シュンと落ち込む桃香。成る程・・・天華はまだ彼女を認めてないから、受け取るつもりは無かったのか。・・・まあ、「まだ」なん

だけど。

「だが・・・次に会う時にもしお前が私が認める程の人物になっていれば・・・その時は受け取ろう。そして、その時は私の真名も預ける」

「・・・！はい！」

（素直じゃないなあ・・・）

「・・・何か言ったか一刀？」

「な、何も言ってないよ。も、もう行こうぜ」

「ふん・・・じゃあな。劉備、張飛」

「はい！お元気で！」

「バイバイなのだ～！」

二人に見送られながら桜桑村を出る俺達。

「じゃあな桃香！張飛！後、関羽や桃香のお母さんにもよろしく言ってくれ！」

「わかりました～！頑張ってくださいー一刀さーん！項仁さーん！」

「また会おうなのだ～！」

「ああ！いつかまた会おう！」

「・・・ふん」

それから一時間程歩くと桜桑村がかなり小さく見え、彼女達の姿もすっかり見えなくなった。

「さてと・・・んじゃ、行くか天華。幽州に」

「ああ、今の幽州がどうなっているか・・・楽しみだな」

次の行き先である幽州、そしてそこを治める公孫賛。一体どんな場所か、どんな人か。今から楽しみだ。

第七話　空腹の鞭使い（前書き）

少し遅れましたが投稿します。新たなオリキャラ登場です。

第七話　空腹の鞭使い

「・・・一刀」

「・・・なに天華？」

「・・・これはどういう状況だ？」

「・・・俺に言われてもなあ」

今私達は森の中にいて、目の前には・・・女性がうつ伏せに倒れていた。髪の色は赤みがかかった茶髪で短髪、腰には武器と思われる鞭が巻き付いていた。

今日は日が強いため一刀が森の中で涼しみながら歩いた方が良い提案し、近くの森を歩いているとこの女性が倒れていたのを見つけ、今に至る。

「・・・ご飯」

「「は？」」

私達が会話していると女性が私達に気付いたのか、初めて口を開いた。だが、ご飯？どういうことだ？

「・・・ご飯食べさせて」

女性がそう言うと同時にグゥ～という音が腹から盛大に聞こえた。これは・・・。

「・・・お腹が減っているのか」

「・・・どうする一刀？」

「食べさせてあげよう。流石にこのまま見捨てるのは気が引けるし・・・」

「・・・それもそうだな」

多少怪しいが・・・だからと言って放っておくのも可哀想だ。一刀が彼女を起こし、私達の食料を食べさせてあげた。

「ほら、ゆっくり食べて。急いで食べると喉が詰まるから」

「うん・・・」

女性は一刀の言う通りにゆっくり食べる。それから一通り食べ終えると寝てしまった。

「・・・どうしよう天華？」

「・・・そいつが起きるまで稽古でもしよう。そいつが何故倒れていたのか気になるしな」

「わかった」

「だがその前に・・・」

私は適当な木を槍で斬る。そして、斬った木を更に細かく斬り、即

席の台にした。それを見て一刀は少しの間驚いていた。・・・まあ、普通の奴には出来んから仕方ないな。

「ここに寝かせてやれ、そのまま地面に寝かせるのも可哀想だ」

「そ、そうだな・・・。にしても天華・・・無茶苦茶だよ」

「・・・悪かったな」

一刀が女性を台に寝かせる。彼女のあの様子だと・・・しばらくは目を覚まさんな。今日はあまり進めなさそうだ、仕方ないが。

「一刀、稽古をするぞ」

「おう」

一刀が剣を抜こうとするが・・・私はそれを止める。今日の稽古は違うことをしたいからな。

「今日は武器無しの稽古をするぞ」

「武器無し?」

「そうだ。一刀、戦場でもし武器が壊れたりしたらどうやって戦う?」

「えーと・・・どうしよう?」

「・・・素手で戦うしかないだろう。そのための稽古だ」

「あ、そっか」

武器を使いこなすのは確かに重要だが、それだけだと武器が無くなった時が困る。いくら武器の達人でも武器が無くなると一気に弱くなってしまう。それを避けるための稽古だ。

「・・・構えろ」

「っ！（スッ・・・）」

私が構え、気を込めると一刀も構える。私が一気に距離を詰め、右手を一直線に突き出す。一刀はかわそうとするも間に合わず、腹に直撃する。

「ぐっ！！いつ・・・！」

「はっ！」

今度は右足で脇腹を狙う。一刀はそれを手で受け止めようとしたが、威力に耐えきれずに吹き飛んだ。

私は体勢が崩れた隙を狙い、両手の手の平で攻撃する。一刀はギリギリで避け、私の攻撃は木に直撃した。凄まじい音と共に木が激しく揺れ、ミシミシと折れる。それを見て一刀の顔色が真っ青になる。

「ち、ちょっと待て天華！？そんなの受けたら下手したら死ぬぞ！？」

「ならば受けない様にするんだな！！」

突き出した体勢から一刀目掛けて右足で回し蹴りをする。一刀はそれをしゃがんで避け、私は回し蹴りの勢いを利用して、右足でもう一度回し蹴りを行い、一刀に叩き込む。

「ぐああっ！！」

直撃し、吹き飛んだ一刀に一気に詰め寄り、右手を叩き込むーーー寸前で止める。まあ、今はこんなものだろう。

「今日の稽古はもう少しするぞ」

「うん・・・。はあ・・・一撃も当てられないなんて・・・」

「悔しいのならば強くなることだ。お前の当分の目標は私に一撃を入れるだな」

「・・・それすらできない気がする」

「今は一生懸命頑張ることだ。前にも言ったが筋は悪くない。今の鍛練や稽古を続ければ成果は必ず出る。焦っても強くはなれんぞ」

「・・・ありがと」

しかし・・・こうも一方的にやり過ぎると流石に自信を無くすか。だが、もっと加減してわざと受けても一刀のためにはならん。・・・難しいな。

それから一刻程稽古を続けると・・・。

「う・・・ううん・・・」

「「！」」

女性が目を覚ました。すぐに稽古を中断し、彼女の傍に立った。

「大丈夫かい？」

「うん・・・ここは・・・？」

「幽州の近くにある森だ。お前が空腹で倒れていたのを私達が助けた」

「空腹・・・あ。そういやここ数日まともなもの食ってなかったっけ・・・。あんた達が食わせてくれたの？」

「ああ」

「あんがと・・・ホント死ぬかと思った・・・」

さて・・・こいつが何者か聞いておくか。

「所で・・・お前何者だ？何という名だ？」

「え・・・えと、その～・・・」

「「？」」

何故か突然狼狽し始めた。まるであの時の一刀の様だな。・・・間違いなく何か隠しているな。仕方ない、前と同じ強引な手を使うか。

「・・・正直に話してもらうぞ」

私は槍を女の喉元に突き付ける。それを見て一刀が止めようとしたが、私は一刀を少し睨み黙らせる。

「・・・悪いけどあたしの名前は言えない」

「・・・何故だ？まさか罪人なのか？」

「違う。けど言えない」

「・・・私は人を痛め付けるのが少し上手くてな。無理矢理吐かされる前に言った方が身のためだぞ？」

私は覇気を込めながら槍を少しだけ突き出し、槍先が少しだけ皮膚に触れ、そこで止める。

「っ！・・・それでも言わない。絶対に・・・！」

「・・・強情だな」

「もういいだろ天華？これ以上してもこの子は何も言わないぞ」

「・・・はあ、甘いぞ一刀。ここはどんな手を使ってでも聞くべきだ」

「そしたら余計に言わなくなるって、大体もしこの子がどこかの貴族や豪族の娘だったらどうするんだよ？」

「・・・それはまずいな」

もし仮に一刀の言う通りだとすれば私達は間違いなく打ち首だな。
自分の娘を痛め付けられて黙っている親はいない。

「・・・だが、一刀。こいつがもしそうだとしたら何故こんな所で倒れていたのだ？」

「それを知りたいから聞いてるんだろ？」

「・・・そうだな」

しかし・・・こいつは自分の素性を言う気がまったく無い。かといって力強くで聞くわけにもいかない。手詰まりだな。

「では一刀、お前ならどうする？」

「この子が言うのを待つ、それしか無いだろ？」

「・・・それまでここで待てと？それか素性も知らん奴と一緒に行動しろと？大体そんな余裕は無い筈だ。私達はこの大陸を回る必要があるのだからな」

「それはそうだけど・・・」

近い内に必ず起きる暴動までにこの大陸を回らなければならない。本来なら今すぐにでも幽州に向かわなければならないのにこいつのせいで遅れている。これ以上待つのは無理だ。私達が何か良い方法は無いかと考えていると・・・女が私達に質問した。

「・・・あのさ、あんた達旅しているって言ってたけど・・・何で

旅してるの？」

「・・・この大陸を回って誰かに仕えるか、自分で旗揚げするか決める為だけど・・・」

「・・・だったらあたしも同行してもいいか？」

「え？」

「何？」

「実はさ・・・あたしもあんた達と似たような理由で旅してたんだよ。けど、途中で盧銀が尽きて・・・」

「ここで倒れていた、か。だが、何故名を言わない？」

それが気になる。そもそもこいつが名前を言えば済む話だというのに。

「そ、その・・・実はあたし家を飛び出して来たんだ」

「・・・何で？」

「・・・あたし、ある将の娘でさ・・・母上が自分が仕えている人にお前も仕えろってしつこく言うんだよ。けど、あたしはその人に仕えたいって思えないし・・・だから」

「・・・自分で仕える人を見つける為に旅をしていたのか」

「・・・うん。多分母上は今必死になってあたしを探している筈だ

から・・・名前を言うのはまずいんだよ」

・・・成る程、確かにそれなら名を言うわけにはいかないな。罪人でも無いのに素性を隠す必要があったのはそういう事か。

「となると・・・名前を聞く訳にはいかないけど・・・連れていく訳にもいかないよなあ」

確かに、母親が探しているかもしれない状況でこいつを連れていくのはかなり危険だ。しかもこいつの母親はどこかの将、下手すれば私達に何らかの罰が来る可能性がある。

「お願い！そこを何とか！あたしは母上じゃなくて自分の意思で決めた人の所で戦いたいんだ！」

こいつは頭を下げて私達に懇願する。・・・そこまでされると簡単に断れんな。

「・・・どうする？」

「・・・お前が決めろ」

こいつに拷問しようとした私に決める権利は無い。一刀が何もするなと言ったから結果としてこいつが言った訳だしな。

「それじゃあ・・・一つあることをするって言うならいいよ」

「な、何をすれば良いんだ？」

「その前に・・・君のお母さんが仕えている人と居場所を教えて欲

しい」

「な、なんで？」

「それは・・・勿論君をその場所に送るためだよ」

「そ、そんな！母上の所に戻ったりしたら、またしつこく言われるじゃんか！」

こいつの言う通り彼女を家に戻せば間違いなくそうなるだろう。こいつはそれが嫌だからこそ、家を出たと言うのに・・・何を考えている？

「多分君のお母さんが君を自分が仕えている人に仕えさせようしている理由は・・・そうした方が君のためになるって思ったからじゃないかな？」

「・・・まあ、その方が活躍しやすいからな」

それに母親も子供と一緒にいた方が安心できる。大抵の場合子の主は親と同じだ。こいつみたいに自分で見つけたいと思う例はほとんど無い。

「それはわかってるよ・・・でもあたしは自分で仕える人を探したいんだ」

「だからそれをはっきりとお母さんに言うこと。そして、旅をさせてほしいって頼むんだよ。ある条件付きで」

「・・・ある条件？」

「うん、『もしもこの旅で仕えたいと思う人に出会えなかったら、その時は母上と同じ人に仕える』って条件」

「・・・そうか、それなら上手くいくかもしれんな」

こいつの母親が自分の主を薦めたのはそれが一番いいと判断したからだ。ならもしこいつがその人物と同じか、それ以上の人物と出会い、その人に仕えたいと言えばこいつの母親も納得するかもしれない。今できる中では一番良い方法だな。

「けどさ、それ・・・もしそういう人に出会えなかったら結局母上と同じ人に仕えることになるじゃん」

「じゃあ他に何か手があるの？」

「・・・ない」

「決まりだな。頑張って見つけることだ」

「・・・それしかないかあ・・・しゃあない」

「君が勝手に家を飛び出したりしなかったらもっといい条件が付いたかもしれないけど」

「・・・おっしゃる通りです」

一刀に痛いところを突かれ、凹んでしまう。一刀の言う通りそうすればお金にも困らなかっただろうに。

「じゃあ決まった所で・・・君のお母さんが仕えている人と居場所について聞きたいんだけど」

「は～い。あたしと母上の家は長沙、仕えている人は・・・孫堅さんだよ」

「孫」・・・？もしや孫氏の末裔か？一刀に聞いた方が良さそうだが・・・。

「・・・孫堅！？まさか江東の虎って言われてるあの！？」

「・・・知っているのか？」

「・・・あ」

私が孫堅のことについて質問すると何故かあちゃあ・・・と言う様な表情になる一刀。・・・まずいことを言ったか？

「・・・あんた本気で言ってんの？今この大陸で孫堅さんを知らない人なんてほぼいないよ？」

・・・しまった、だから一刀はあんな表情をしたのか。今ではなく後で一刀に聞くべきだった。この女の態度からして孫堅と言うのはおそらくこの時代でかなり名の知れた人物だ。なのに知らないなんて言うものだからおかしいと思ったのだろう。

「あ～・・・天華は今まで人気の無い山でひっそり過ごしてきたから今の大陸をあまり知らないんだ」

「そうなの？」

「・・・ああ、あまり知らん」

一刀がとっさに誤魔化してくれて、私はそれに合わせる。何としても誤魔化さなければ・・・。

「ふ～ん・・・にしては変だね。さっきの気迫・・・かなり凄かったよ?あれほどの気迫を出せる以上はかなり強い筈だけど・・・あんたなんて名なの?」

私はちらっと一刀の方を見ると、一刀は首を縦に振った。・・・やはり言うしか無いか。

「・・・姓は項、名は仁、字は迅凄」

「・・・項仁?聞いたこと無い名だけど・・・それに『項』ってまさか・・・」

・・・やれやれ、これで三度目だな。一々言わねばならんのは疲れる。

「・・・言っておくが私はあまり知らんぞ。姓が一緒なだけだからな」

「あ、そうなの。えーと、そっちのあんたは・・・」

「姓は北、名は郷、字は優心。よろしくな」

「北郷って言うのかあんた。二人共変わった名前だねぇ」

・・・この時代の人間ではないからな。一刀に至っては違う世界から来た者だしな。・・・言うわけにはいかないが。

「よく言われるよ。所で君はなんて呼べばいいんだ？」

「う～ん・・・まだ本名は言えないし・・・真名を言おっか？」

「・・・そう簡単に言うのもどうかと思うぞ」

基本的に真名は親や親戚、自分が認めた者以外には言うものではない。

「じゃあ・・・『塞』でいいや。あたしの名前の一部なら大丈夫だろ。よろしくな、北郷、項仁」

「よろしく、塞」

「・・・ああ」

「さーて・・・話が済んだ所で、改めて幽州に向かおうか、と言いたい所だけど・・・」

「・・・こいつのせいで結構時間を食ったからな」

「・・・すいません」

空を見ると少し日が暮れていた。今日はここらで寝た方がいいな。それまで鍛練でもするか。

「今日はここで寝るとして・・・鍛練でもすれば良いかな？」

「・・・それがいい」

私が向こうで素振りをしようかと思ったが・・・。

「なあ項仁、あたしと一度手合わせしないか?あたし結構強いぜ?」

塞から手合わせを申し込まれた。・・・こいつの実力を知るにはいい機会か。

「・・・よかろう、かかってこい。一刀はそこで見ておけ」

「わかった。けど、やり過ぎるなよ?」

「ああ」

一刀が審判役で、私と塞がそれぞれ武器を構える。塞の武器はやはり鞭か、今まで戦ったことの無い相手との手合わせ・・・少しは楽しめるか?

「始め!」

「はあ!!」

合図と共に突っ込もうとしたが、塞の鞭に阻まれた。その独特の動きを見せる鞭。塞の鞭は私の槍の二倍程の長さがある。・・・簡単には近づけんな。

「うりゃうりゃ!!」

変幻自在に鞭を振るい、私を近づけない様に攻撃する塞。・・・一刀ならこの時点で勝ち目が無いな。少なくとも今の一刀が勝てる相手ではない。

だが、ここは森の中。障害物となる木が至る所にあるためむやみに鞭を振るえないと思ったのだが・・・。

「甘い！！」

塞は跳躍すると同時に木の枝に鞭絡ませ、振り子の動きを利用して私に接近し、蹴りを叩き込もうとする。それを私は槍で防ぐが、かなりの威力で少し後退りをしてしまう。

「・・・中々の威力だな」

「ちえ～、そんなものかよ。アンタ強いなあ」

「今のはギリギリだった。私でなければ勝っていただろう」

「う～あたしより格上かあ。ま、だからと言って負ける気なんて無いけどね！」

再び鞭を振るう塞、槍や剣、斧の様な直線的な動きではなく独特な動きで攻撃するため、中々やりづらい。しかも、やつの鞭はどうやら鉄が編み込まれているため攻撃そのものが防御にもなっている。

「鞭ではなく、鉄の鞭か・・・厄介だな」

「そゆこと！」

「・・・鉄の鞭？そういや誰かがそんな武器を使ってた様な・・・？」

一刀がどうやら思い当たる節があるようで考えている様たが・・・今はこっちに集中するか。

「うりゃー！」

塞は鞭を一直線に放ち、それをギリギリで避けようとしたが・・・それは失敗だった。鞭でちょっとした力加減で軌道が変化する。つまり・・・。

「もらったあ！」

「ぐっ！！」

「ギリギリ」ではかわしきれないのだ。ギリギリで避けようとしてもその前に軌道が変化し、直撃してしまう。

「天華！」

「あ・・・だ、大丈夫！？」

「問題ない！」

鉄鞭が直撃した所がかなり痛む、一部とは言え鉄が直撃したのだ。骨にヒビはいってないだろうが・・・それでもかなり堪えるな。

「・・・ふうー、よし」

私は深呼吸し、気分を少し落ち着かせる。痛みは消えんが・・・気分はマシだ。

「・・・次で決める」

「へっ！やってみろ！」

奴はまた鞭を一直線に振るう、と同時に一気に塞目掛けて槍を壁になる様に振り回すながら走り出す。そして、鞭が槍に絡まり鞭を引っ張る。

「・・・力比べと行こうか」

しばらくの間鞭を引っ張り合う。すると塞の方が先に疲れ出す。

「ぐぎぎ・・・！あ、あんたどんだけの力と体力があるんだよ・・・！？」

「・・・さあな」

私は更に力を込め、鞭を引っ張る。鞭と一緒に塞も引っ張られ、空中に浮かぶ。その隙を狙い、蹴りを叩き込む。

「ごふっ！？」

空中で蹴られ、思いっきり吹き飛ぶ。何とか受身は取った様だが、体勢が崩れた上に武器の無い塞にもう打つ手はない。

「そこまで！この手合わせ天華の勝ち！」

「あー負けたあ。やっぱアンタ強いなあ」

「お前も中々のものだ」

「あんがと、よし決めた！あたしは水葉だ。よろしくな」

「真名か？いいのか？」

「ん。アンタの強さに敬意を評して真名を預ける。あ、北郷。アンタにも預けるよ」

「俺にもか？」

「うん。だってアンタ達は命の恩人だし、北郷はその上あたしをかばってくれて道も示してくれたしな。真名を預けるには十分だよ。改めて言うね、あたしの真名は水葉（すいは）だ。よろしく」

・・・ふむ、決して悪い奴でもなさそうだ。それに家を出てまで自分で主を見つけようとする覚悟・・・（意地もあるだろうが）真名を預けるには十分だな。

「ありがと水葉。俺は一刀だ」

「・・・天華だ。よろしくな水葉」

「一刀と天華ね。じゃあ、一刀っちと天華っちって呼んでいい？」

「・・・ほう？」

「ごめんなさい！」

変な単語を付けようとしたので少し睨むと直ぐ様頭を下げた水葉。
まったく・・・私がそんなこと許可する訳無いだろう。

「俺は別にいいけど・・・」

一刀は別に良いようだ。元々真名が無い奴だからな。余程変な呼び方で無い限り良いのだろう。・・・「っち」が付くだけで十分変だと思うが。

「あんがと一刀っち！」

「・・・私は許さんぞ？」

「はい！天華さん！」

・・・どうやら私は「さん」付けの様だ。そこはどうでもいいが。

「じゃあ、手合わせと真名の交換が終わった所で・・・食事にしようか」

「わかった」

「は～い」

食事を済ませた後は一刀と水葉が手合わせをしたが・・・、結果は勿論一刀の負けでかなり凹んでいた。・・・流石に可哀想と思ってしまった。

・・・なんだかんだで私達の旅に加わった水葉。さて・・・明日か

らは急いで幽州に向かうとするか。結構時間を食ったからな。

ちなみに私は一刀に今の時代の者達について色々と教えてもらった。今回みたいなことが起きない様に。

それと一刀は鉄鞭を使う武将に心当たりがあった様だが・・・完全に思い出すことはできなかった様だった。私がいずれわかるだろうから気にしなくていいだろうと言うと一刀もそうだなと納得し、忘れることにした。長沙に着けばわかることだからな。

次の日はどうなるのか・・・楽しみだ。

第八話　幽州到着（前書き）

展開がちょっと速い話です。後、あのメンマ好きはいません。時期的には彼女が仕官する前のためです。

第八話　幽州到着

俺達が塞（真名は水葉）と出会ってから二日後、ようやく幽州に到着した俺達。早速城の中に入ると・・・。

「・・・へえ、中々いい街だな」

「そうだね～街の人々が楽しそうにしてるし」

「・・・ふむ、ここの太守がしっかりと街を治めていると言うことか」

洛陽とはまったく違う光景がそこにあった。人々は楽しそうに笑い、街は賑わっていた。

「んでさー、どうするの一刀っち？」

「そうだな・・・早速だけどここの太守に会おうと思ってる」

「確か・・・公孫賛だったな。そいつを見極めるためか」

「正解、実際に会った方がどんな人なのかわかるからね」

「けどさー、一刀っち。早速会うって言ったも・・・何かあてがあんの？今のあたし達が普通の方法ですぐに謁見しようとしても無理あるよ？」

水葉は言う通り今まったく名の知れてない俺達が普通の方法ですぐに謁見するなんてのは無理がある。

「大丈夫、一つアテがあるから」

「どんな？」

「桃香・・・劉備だよ」

「・・・誰それ？聞いたこと無いけど？」

そりゃそうだ。桃香に会ったのは水葉に出会う前だし、まだ言ってないしな。

「その内英雄の一人になるかもしれない人。覚えておいて損は無いよ」

「ふ～ん・・・劉備ねえ。で、なんでそれがあてになるんだ？」

「ここの太守の公孫賛さんと桃香は知り合いでお互いの真名を交換している関係なんだよ。だから彼女の名を出せば・・・」

「・・・謁見できると言うことか。それにお前は劉備の真名を受け取っているから尚更謁見しやすいな」

「そういうこと」

その後城の前に居た兵士達に公孫賛殿に謁見したいと伝える。桃香の名前を使ったことですぐに会うことが出来た。兵士達に案内され、玉座の間に入る。

「ようこそ幽州へ、私が太守の公孫賛だ」

部屋に入ると赤い髪の女性が公孫賛と名乗った。・・・この人が公孫賛さんか。

「姓は北、名は郷、字は優心と言います」

「姓は項、名は仁、迅凄と申す」

「塞です。訳あって他の名がありません」

「ふむ」

公孫賛さんが自己紹介をしたので俺達もそれぞれの名前を言う。

「確か私に謁見したいと言っていたな?それとお前達は桃香の名前を言っていたが・・・桃香を知っているのか?」

「はい、彼女とは桜桑村で賊達を退治した時に知り合い、互いの真名を交換しあいました」

「・・・と言っても交換しあったのは一刀だけで私はしていない。それに水葉・・・塞は桜桑村から幽州に向かう途中で知り合ったので、実際に劉備を知っているのは私と一刀だけです」

「成る程。で、何故私に会いに来たのだ?桃香の名前を使ったのはすぐにでも私に会いたいからだろう?」

どうやらそれなりに頭は回る様だ。さてと・・・ここからが本番だな。

「その通りです。早速ですが公孫賛殿にお聞きします。貴女は今の世の中をどう思っていますか？」

「・・・どう、とは？」

「そのままの意味です。今この大陸は大いに乱れています。漢王朝はもうほとんど機能しておらず、役人は腐りきっており、民はその役人が決めた重い税のせいで苦しみ、何時暴動が起きてもおかしくない状態です」

「・・・だろうな」

俺の質問に苦い表情をする公孫賛さん。彼女もわかっているのだろう。・・・近い将来必ず大きな暴動が起こると。

「例え、その暴動が鎮静したとしても・・・その後は間違いなく戦乱の世になります。そうなった時公孫賛殿はどうするつもりなのか、それを知るため貴女に謁見しに来たのです」

「・・・つまり私がお前達に相応しい主になのかどうか確かめに来たと言う事か」

「・・・その通りです」

この人に俺達が協力するだけの価値があるか・・・それを確かめるために幽州に来たのだから。上から目線な感じだけど・・・仕えるなら俺達は価値のある人に仕えたいからな。

「ちなみに・・・私がお前達の目に止まらなかったらどうするつもりだ？」

「・・・そうなった場合は他の人を探すだけです」

「では逆に私がお前達に相応しい人物だった場合は？」

「そうだとしても、もうしばらくは旅を続けます。まだ旅をしなければならない理由がありますから」

ちらっと天華と水葉の方を見る。天華の「項羽」としてしなければならない事、そして水葉を一度長沙にいる母親の元に帰すためにもここで旅を終える訳にはいかない。

「どちらにせよここに留まる気は無いと言うことか」

「はい」

「わかった、ではお前の質問に答えよう。・・・残念だが、私はお前達が望む様な人物ではない。私には優れた武も知も無い。それに・・・私ではここ幽州を守るのが精一杯だ。とても戦乱の世を治めること等できない」

「・・・そうですか」

「・・・すまんな。お前達の期待に応えることが出来なくて」

「いえこちらこそ、貴女を試す様なことをしてすいません」

本来なら太守にこんな人を試す様な無礼なことをして、ただで済むことはほとんど無い。にもかかわらず彼女は期待に応えられないからと言って謝罪したのだ。・・・かなりいい人だな。

「構わんさ、お前達は仕えるに価する人物を探すために旅をしているのだろう?そして私はお前達の目に止まらなかった、それだけさ。所で・・・これからお前達はどこに行くつもりだ?」

「とりあえず・・・南皮に行こうかと」

「麗・・・袁紹に会うつもりか?」

「そうです」

史実ではその内河北全体を治め、曹操と決戦を行う人物。本では決断力に欠けた優柔不断な人間だと書いてあったが・・・やっぱり実際に会った方がどんな人物なのかはっきりわかる。その上こっちは俺の世界とは別の世界だ。もしかしたら優れた人物になっている可能性もある。

「・・・それは止めた方がいいぞ」

「何故ですか?」

「はっきり言ってあいつはなぁ・・・袁家の名ばかりを使って威張り散らしている様な奴なんだ。とてもお前達に相応しい人物とは思えない」

「そう言えば・・・確か母上もそんなこと言ってた様な」

「知っているのか水葉?」

確か水葉の家は長沙の筈だ。なのにかなり離れた場所にいる袁紹に

会っているのか?

「あたしは実際に会ったことは無いけど・・・母上が遠征中に一度会ったらしくてさ。家に戻って来た後に確か『あんなバカがこの地上にいたとは思わなかった』とか言ってた」

「「・・・・・・」」

・・・どんな人なんだ?「あんなバカ」って・・・。まさかどこかの漫画の様に「オーホッホッホッ!」とか言ってるんじゃないだろうな・・・?いや、流石にそれはあり得ないよなぁ。

「まあ・・・とにかくはっきり断言する。あいつの所だけは止めた方がいいぞ?」

「・・・はあ」

「・・・どうするんだ一刀?」

・・・どうしよう?かなり人が良さそうな公孫賛さんが会わない方がいいって、はっきり断言する様な人だからなあ・・・。

「・・・一応行こう。天華の目的のためにも」

「私の・・・ああ、そういうことか」

「天華さんのため?どゆこと?」

確かここからもうちょっと北東に行った所が・・・天華の部下の一人である龍且が亡くなった場所の筈だ。・・・正確には韓信と曹参

によって討ち取られたんだっけ。

「・・・水葉、誰にだって隠していることの一つや二つはあるだろ？」

「・・・そうだね、ごめん」

自分のことがあるため、それ以上追及しない水葉。天華が項羽であるなんてこと・・・誰かに言うわけにはいかないからな。公孫賛さんも何か事情があると察知してくれたため、何も聞いてこなかった。

「どうやらそっちにも事情がある様だな。まあ、お前達の旅だ。お前達自身が決めるといい」

「はい、ではこれで失礼ーーー」

俺がそろそろここを離れると告げようとした瞬間・・・。

「失礼します！公孫賛様！」

「っ！騒がしいぞ！何事だ！」

突然玉座の間に兵士の一人が駆け込んできた。俺達全員が一斉にそっちに振り向く。・・・何が起きているんだ？

「実は・・・約一千の賊が近くの村に襲撃し、その村が壊滅したとの報告が！」

「何だと！？本当か！？」

「はい・・・その後賊達は近くの山にある根城に戻った様です。おそらく奪った食料で宴会していると思われます」

「わかった!すぐに討伐に向かう!軍の用意を!」

「はっ!」

命令を受けた兵士がすぐに部屋を出て、公孫賛さんが席を立ち、周りの部下達に命令していた。

「・・・天華、水葉」

俺が二人を呼ぶと仕方ないと言った表情をしていた。

「・・・やれやれ」

「お人好しだねぇ、一刀っち」

「う・・・ばれてる?」

「・・・ああ、お前の事だ。どうせこれ以上の被害を出さないためにも賊達を倒しに行こうと言いたいのだろう?私は構わんぞ。賊など全員あの世に送ってやろう」

「あたしもムカつくしね。賊達を全員地獄に叩き落としてやるよ」

二人の纏っていた気配が徐々に鋭く冷たい物へと変わっていく。やっぱり二人も許せない様だ。

「・・・ありがとう。公孫賛さん!」

「なんだ！私は忙しいんだ！まだ用があるなら後でーーー」

「俺達も協力します！」

「な、なに！？」

「今回の討伐にあたし達も協力するってこと！こう見えてもあたし達強いよ？」

「・・・賊ごときに貴重な兵達を死なせたくは無いだろう？」

「し、しかし・・・良いのか？」

躊躇う様な表情で俺達を見る公孫賛さん。多分彼女は何の関係も無い俺達を巻き込むことを心配しているのだろう。

「はい」

「ああ」

「もち！」

「・・・わかった。ならこの討伐の間だけだが、お前達を客将として雇いたい。良いだろうか？」

「了解しました。早速ですが俺達はどうすれば良いですか？」

「賊達の根城に向かうまでは私の護衛になってもらいたい。流石に今入ったばかりの者に軍を任せるのは無理がある」

それが妥当だろうな。たった今客将になった俺達に一軍を任せるのはいくらなんでも無茶苦茶だ。

「所でお前達は馬に乗れるか？今回は一刻も早く賊達を討伐するためにも騎馬隊で向かうつもりなのだが・・・」

「乗れるよ」

「・・・問題ない」

・・・まずい。水葉も天華も馬に乗れる様だけど、俺は乗ったことが無い。今まで馬術なんてしたこと無いし・・・。その様子に気付いた天華が話しかけてくる。

「・・・もしかして乗れんのか一刀？」

「・・・ごめん」

「それは困ったな・・・となると北郷はここで待つしか無いな」

「そんな・・・！」

馬に乗れないから足手まといになるのはわかる。けど、二人に戦うと言っておいて自分だけここで待たなくてはならないのか？

「・・・私と一緒の馬に乗ればいい」

「・・・え？」

「・・・私は馬の扱いに慣れている。例え、乗る奴が一人増えても問題ない」

「いや・・・でもさそれって・・・」

天華と二人乗りする事になるけど・・・。色々と不味いんじゃあ？

「えっと・・・ちなみにどうやって二人乗りするんだ？」

「・・・私の腰に掴まればいい。だが・・・もし私の胸に少しでも触れれば・・・わかるよな？」

「はい！！」

殺気と槍を同時に向けれる。そんなことしたら一瞬であの世に行ってしまう。・・・そうでなくても地獄を見ることになるな。良くてズタボロにされる程度かな・・・？

「・・・それでいいか公孫賛殿？」

「あ、ああ・・・ではここで待っていてくれ。皆に紹介するのと、どう攻めるか話し合わなければならない」

「「はい」」

「・・・了解」

その後軍議を行い、千の騎馬隊で討伐することが決まった。その際に公孫賛が俺達を他の者達に紹介し、自分の護衛になってもらうと説明した。そして、全ての準備が完了し、被害にあった村へと向か

った。・・・勿論俺は天華と一緒の馬に乗っている状態で。後それを見た兵士達が情けないと言っていたが何回か天華に睨まれ、言わなくなったとなんてこともあった。

ちなみに初めて馬に乗ったがやはり違和感があった。天華に捕まっているから落馬せずに済んでいるが・・・俺だとこうもいかないだろう。この戦いが終わったら馬術の練習もした方がいいな・・・。

幽州を出てから二刻程経つと被害にあった村に到着したが・・・その光景は地獄だった。地面はほとんどが血で染まり、強烈な死臭が臭っていた。この前の桜桑村よりも更に酷い光景が目の前に存在した。

「・・・生存者がいるかどうか調べろ!生存者がいるならすぐに保護するんだ!村を調べ終えたらすぐに軍議を行うぞ!」

「「はっ!」」

その光景に一瞬だけ目を反らしつつも、軍に命令する公孫賛さん。兵士達は馬から降りて村を調べ始め、俺達もそれに加わる。

「・・・酷いね」

「・・・ああ、子供や老人も関係無く徹底的に殺している。これでは生存者はほとんどいないだろうな・・・」

この光景を見て怒り狂っている俺と違い、冷静に状況を確認する天華と水葉。二人は多くの死を見てきたからだろうな・・・。

「・・・一刀」

「・・・なんだよ」

「・・・お前がこの光景を見て憤怒しているのはわかっている。だが、今はその怒りを抑えて村を調べることを優先しろ。・・・わかったな？」

「・・・ああ」

つい手を握りしめ、力が籠る。・・・もうすぐこんなことーーーいや、これ以上に酷い光景が頻繁に起きる時代になってしまう。それを止めたくても止められない自分が悔しくて仕方ない。・・・所詮全ての人を救うことなんて不可能だったこともただの戯言だってこともわかっている。それでも・・・俺は救いたい、多くの人達を、何の力も無い人達を・・・。

「・・・それは所詮ただの自己満足なんだろうけどな。それでも・・・俺は戦う」

それが俺の理想・・・そして、覚悟なのだから。

「・・・？何を言ってんの一刀っち？」

「・・・何でも無いよ。ただ、改めて俺の覚悟を確かめていただけ」

「・・・そうか、ならさっさと調べるぞ」

俺の理想を知っている天華は何となく察知した様で話を切り上げてくれた。そして村中を徹底的に調べると・・・。

「・・・天華、水葉。気のせいかもしれないけど・・・女性の死体だけやけに少なくないか？」

近づくのが少し怖いが・・・それでも死体に近づき、調べるとほとんどが男性のものだった。次に多いのが年老いた老人や子供で若い女性の死体がほとんど無かった。

「・・・気付いたか」

「・・・正解だよ一刀っち。じゃあ、そんな一刀っちに質問ね。なんで女性の死体が少ないと思う？」

この村には女性が少ないからか・・・或いはその死体を片付けたからーーーって、これは無いな。賊がそんなことする筈無いし、仮にしたのなら死体をほとんど片付けている筈だ。てことは・・・まさか！？

「・・・村の女性を連れ去ったからか・・・！？」

「・・・またまた正解だよ一刀っち。賊が自分の慰めものにするために連れ去ったんだよ」

「・・・賊がよく取る行動だ」

「じゃあ、村にいた女性達は・・・」

「・・・おそらく奴等の根城にいるだろうな」

そこで賊達の慰めものにされている・・・。それがはっきりわかると無意識に手に籠る力が増し、皮膚に爪が少し食い込んでいた。そ

の様子を見ていた天華が溜め息を漏らす。

「・・・ふう、少しは抑えろ。その怒りは賊達にぶつければいい。・・・かといってそれはほどほどにしておけ。冷静に戦わなければ死ぬぞ」

「・・・わかった」

天華の言われ少し心を落ち着かせる。彼女の言う通り、こんな状態で戦えば賊相手とは言え最悪の場合死んでしまう。戦闘中に冷静でいられない奴ほど死にやすい奴はいない。

「ねー、一刀っち、天華さん。どうやら村中を調べ終えたみたいだよ。兵士達が引き上げてる」

「・・・じゃあ、俺達も引き上げよう」

「・・・そうだな」

兵士達が引き上げているって事は水葉の言う通り、村中を調べ終わったのだろう。急いで公孫賛さんの元に戻るとほんの僅かだが、生き残った村人達が保護されていて、彼等から話を聞いていた。それが終わると村人達を数人の護衛を付けて幽州に向かわせた。

「では軍議を始める。早速だが、私は今から奇襲を掛けて殲滅しようと思う。理由は今賊達が奪った食料で宴会をしている可能性が高いからだ」

「つまり、宴会をしていて隙だらけの今を狙うって事？」

「正解だ。騎馬隊の速さなら奴等が体勢を立て直す前に攻撃できる」

宴会をしているのなら酔っ払っている可能性が高いし、その状態から立て直すのは難しい。そうでないとしてもすぐに対応するのは無理だ。例え見張りが無事でも他の奴等がまともに動けないのなら見張りもあまり意味が無い。

「でも、連れ去られた女性達はどうするんですか？もしかしたら賊達が女性達を盾にする可能性もありますよ？」

「それが問題なんだ・・・」

賊達の中に頭が少し回る奴がいればそうしてしまうだろう。大抵の賊は自分の命が助かれば他がどうなろうが構わない奴等だ。自分の命を守るためなら平気で村人達を盾にするだろう。そうなった場合、手が出せなくなってしまう。その人達を見捨てる訳にはいかないし・・・。

「・・・先に数人を奴等の根城に潜り込ませ、女性達を助けたらどうだ？それが終われば根城に火を付ける」

「その火を合図に一斉に殲滅すると言うことか。いきなり自分達の根城から火が上がれば混乱するし、中々良い手だが・・・誰がそれをする？」

「・・・私と塞と一刀の三人で潜入する。私達はさっき客将になったばかりだ。なら、こういう行動の方がいい」

「俺達が軍を率いれない以上はそうした方が動きやすいってことか」

「それにあたし達結構強いからね。火が上がっている最中にそんな奴等が暴れれば相手を更に混乱させられるんじゃない？」

「危険な役だが・・・任せていいだろうか？」

また公孫賛さんが躊躇いがちに言う。潜入ってのはそれ自体が非常に危険な行動だし、俺達三人だけで潜入するとなると更に危険度が増すため、身を案じてくれてるのだろう。後問題があるとすれば・・・俺だ。また人を殺さなければならないのだから。

「・・・一刀、嫌ならお前は止めても構わんぞ」

迷っている俺に言う天華。・・・心配してくれてるのか。俺は腰にある「黄龍」を掴み、目を少しの間だけ閉じる。・・・ここまで来て逃げるなんてあり得ないし、天華と水葉の方でも公孫賛さんの方でも戦って人を殺すことは変わらない。それに・・・俺は決めた筈だ。一人でも多くの人を助けるために戦うと、だから・・・俺は賊達を殺す。今度は迷ったりしない。

「・・・俺は大丈夫だ。天華」

閉じた目を開け、はっきりとした意思で天華の目を見つめる。

「・・・そうか、水葉は？」

「問題無いよ」

「・・・私達は構わないぞ公孫賛殿」

「・・・わかった、お前達に潜入を任せる。さっきの通りに動いて

くれ」

「「「はい」」」

「全員直ちに取りかかれ！後、三人は諜報の者から詳しい情報を受け取ってくれ！」

「「「はっ！！」」」

軍議が終わるとすぐに殲滅戦の準備を進める俺達。全ての準備が完了し、根城の近くまで進軍、騎馬隊は賊達の根城の近くにある森に身を隠し、俺達は賊達の目を掻い潜って根城の裏側に到着した。

「行くぞ天華、水葉」

「ああ」

「おう」

「行動・・・開始！」

俺が言うのと同時に俺達は根城に乗り込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6716x/

新・恋姫無双～蘇りし覇王と舞い降りし御遣い～

2011年11月22日02時02分発行